岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 210

鹿　田　遺　跡

県立岡山病院第Ⅲ期
整備事業に伴う発掘調査

2007

岡山県教育委員会

1　遺跡遠景（南から）

3　溝 3 ～ 8（西から）

2　溝 2 獣骨出土状況（東から）

M 3

4　井戸 2（東から）と出土鉄鏃

序

この報告書は、県立岡山病院第Ⅲ期整備事業に伴い、平成18年度に実施した岡山市鹿田遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

鹿田遺跡の位置は岡山市街地の南部にあたりますが、かつては旭川河口と児島湾に近い河川・海上交通に好適な環境にありました。本遺跡の位置する鹿田地区周辺には、岡山県の平安時代の歴史を物語る貴重な文献が残されていることで著名な、摂関家の殿下渡領四ヶ荘の一つである鹿田荘が存在したことが知られていますが、本遺跡はまさにその所在地の有力候補の一つに挙げられています。

岡山県立病院内の鹿田遺跡については、第Ⅰ期・第Ⅱ期整備事業に伴って、平成13年度以降３次にわたった調査で、平安時代～鎌倉時代にかけて、集落が営まれたことが判明しています。

今回の調査でも、平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物が確認されました。その中で注目される成果の一つに、調査区の北端において検出された東西方向に掘削された複数の溝が挙げられます。これらの溝は、ほぼ同じ位置に繰り返し掘り直されていることから、東西方向を強く意識していることを感じさせるとともに、検出された位置が現在の用地境付近であることや、現地表に残る地割りの方向とよく一致することから、この溝が土地を区画する役割を果たしていたことが推察され、土地区画の起源が鎌倉時代まで遡る可能性を示しています。

また、出土遺物には、緑釉陶器など、当時の貴重な遺物も含まれており、本遺跡と鹿田荘の経営に携わった人々との関連性が注目されます。

これらの発掘成果を収載したこの報告書が、地域の歴史・文化を解明する基礎資料として活かされるとともに、遺跡の保護・保存のため有効に活用されることを願っています。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、岡山県保健福祉部、県立岡山病院、地元住民の方々をはじめとして、関係各位から多大な御支援と御協力をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成19月３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　　松　本　和　男

例　　言

1　本書は、県立岡山病院第Ⅲ期整備事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県保健福祉部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、岡山市鹿田本町3-16に所在する鹿田遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、平成18年度（４～６月）に平井泰男・山磨康平・河合　忍が担当して実施した。調査面積は1,060㎡である。

3　調査記録および出土遺物の整理は、平成18年度（７～10月）に河合が担当し、岡山県古代吉備文化財センターにて実施した。

4　本書の執筆は平井・河合が担当し、全体の編集は河合が行った。

5　本書に用いた高度は海抜高である。

6　本書に用いた方位は真北を示し、平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。抄録に記載した経緯度は日本測地系に準拠している。

7　本報告書掲載の遺構および遺物実測図の縮尺は、一部の例外を除いて以下のように統一し、各図にも明記している。

遺　構

井戸・土壙・溝断面：1/30

遺　物

土器：1/4　土製品・石製品・金属製品：1/3　木製品：1/4・1/10

8　本報告書に掲載した遺物番号は、土器、土製品、石製品、金属製品、木製品に分けて通し番号を付け、土器以外については下記の略号を番号の前に付けている。

土製品：C　石製品：S　金属製品：M　木製品：W

9　土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、口縁部または底部の残存率が1/6以下のため、径の復元に不確実性のあることを示す。

10　本報告書における土層の色調については、『新版 標準土色帳』（農林水産省農林技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所監修）によっている。

11　第２図は国土地理院発行1/25,000地形図「岡山北部」・「岡山南部」を複製・加筆して使用した。

12　遺物写真については、江尻泰幸が担当した。

13　出土動物遺体について、富岡直人氏（岡山理科大学）から有益な教示を受けた。記して厚くお礼を申し上げる。

14　下記の諸機関に鑑定・分析等を委託した。

種実同定・放射性炭素年代測定　　古環境研究所株式会社

木製品の樹種鑑定・赤外線写真撮影　　元興寺文化財研究所

15　本書に関連する出土遺物および図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

目　次

巻頭図版
序
例言
目次
第１章　歴史的・地理的環境 …… 1
第２章　調査の経緯と経過 …… 5
　第１節　発掘調査に至る経緯と調査・整理の経過 …… 5
　第２節　発掘調査および報告書作成の体制 …… 7
第３章　発掘調査の概要 …… 8
　第１節　遺跡の概要 …… 8
　第２節　遺構・遺物 …… 9
　　1　井戸 …… 9
　　2　土壙 …… 18
　　3　溝 …… 18
　　4　遺構に伴わない遺物 …… 24
第４章　総括 …… 26
　第１節　鹿田遺跡（県立岡山病院）の変遷 …… 26
　第２節　鹿田遺跡（県立岡山病院）の調査成果の位置づけ …… 27
付載　自然科学的分野における分析・鑑定 …… 32
　付載１　鹿田遺跡における種実同定（㈱古環境研究所） …… 32
　付載２　鹿田遺跡における放射性炭素年代測定（㈱古環境研究所） …… 42
遺構一覧表・遺物観察表 …… 43
図版
報告書抄録
奥付

図　目　次

第１図　調査位置図（1/2,000,000）…… 1
第２図　周辺の主要遺跡分布図（1/35,000）…… 2
第３図　調査地位置図（1/10,000）…… 3
第４図　調査区配置図（1/1,200）…… 5
第５図　検出遺構全体図（1/400）…… 6
第６図　遺構全体図・基本層序（1/300・1/30）…… 8
第７図　井戸１・出土遺物①（1/30・1/4）…… 9
第８図　井戸１出土遺物②（1/3）…… 10
第９図　井戸２出土遺物①（1/3）…… 10
第10図　井戸２・出土遺物②（1/30・1/4）…… 11
第11図　井戸２出土遺物③（1/4）…… 12
第12図　井戸３・出土遺物（1/30・1/4・1/10）…… 13
第13図　井戸４・出土遺物（1/30・1/4）…… 14
第14図　井戸５・出土遺物（1/30・1/10・1/4）…… 15
第15図　井戸６・出土遺物①（1/40・1/4）…… 16
第16図　井戸６出土遺物②（1/4・1/3）…… 17
第17図　土壙１・出土遺物（1/30・1/4）…… 18
第18図　溝１（1/30）…… 18
第19図　溝２・出土遺物（1/30・1/4）…… 18
第20図　溝３・４・５・７（1/60）…… 19
第21図　溝３～８（1/30）…… 20
第22図　溝３～８出土遺物（1/4・1/3）…… 21
第23図　溝３～８上層（５・６層）出土遺物（1/4・1/3）…… 22
第24図　溝９・出土遺物（1/30・1/4・1/3）…… 23
第25図　溝10・出土遺物（1/30・1/4）…… 23
第26図　溝11・出土遺物（1/30・1/4）…… 24
第27図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/3）…… 25
第28図　鹿田遺跡（県立岡山病院）遺構全体図（1/1,000）…… 26
第29図　鹿田遺跡（岡大医学部）の事例（1/60）…… 28
第30図　鹿田遺跡周辺地図と地割りの方向（1/25,000）…… 29
第31図　旭川右岸微地形および遺跡位置図（1/40,000）…… 30
第32図　旭川流域の荘園分布推定図 …… 31

巻頭図版目次

巻頭図版１　１　遺跡遠景（南から）
　　２　溝２獣骨出土状況（東から）
　　３　溝３～８（西から）
　　４　井戸２（東から）と出土鉄鏃

図　版　目　次

図版１　１　１区全景（南西から）
　　２　２区全景（南から）
図版２　１　井戸１上層断面（南から）
　　２　井戸１（北から）
　　３　井戸２検出状況（東から）
　　４　井戸２土層断面（東から）
　　５　井戸２上層遺物出土状況（東から）
　　６　井戸２発掘調査風景（南東から）
　　７　井戸２（西から）
　　８　井戸３井筒検出状況（東から）
図版３　１　井戸３（東から）
　　２　井戸３出土井筒
　　３　井戸４（東から）
　　４　井戸５（東から）

5　井戸５木製品出土状況（東から）
6　井戸５井筒検出状況（東から）
7　井戸６上層遺物出土状況（東から）
8　井戸６下層遺物出土状況（南東から）
図版４　1　井戸６下層遺物出土状況（南東から）
2　井戸６（東から）
3　土壙１（南から）
4　溝２発掘調査風景（南から）
5　溝２獣骨出土状況（東から）
6　溝３～８発掘調査風景（東から）
7　溝３～８土層断面（東から）
8　溝３～８（西から）
図版５　1　溝９～11（西から）
2　溝９～11発掘調査風景（西から）
3　溝９土層断面（西から）
4　溝10（西から）
5　溝11（西から）
図版６　出土土器１
図版７　出土土器２
図版８　出土土器３
図版９　出土土器４・土製品・石製品・金属製品・木製品１
図版10　出土木製品２

写　真　目　次

写真１　井戸１出土粘土塊 …… 10
写真２　溝９～11調査風景（西から） …… 23

表　目　次

表１　文化財保護法に基づく提出書類一覧 …… 7
表２　鹿田遺跡（県立岡山病院）遺構消長表 …… 27
表３　鹿田遺跡（県立岡山病院）出土食器の用途種類別組成表 …… 28
遺構一覧表
表４　井戸一覧表 …… 43
表５　土壙一覧表 …… 43
表６　溝一覧表 …… 43
遺物観察表
表７　土製品観察表 …… 43
表８　石製品観察表 …… 43
表９　金属製品観察表 …… 43
表10　木製品観察表 …… 43
表11　土器観察表 …… 44

第１章　歴史的・地理的環境

岡山市街地の中心部に位置する鹿田遺跡は、中国山地に源を発する県下三大河川の旭川が形成した岡山平野の沖積地上に位置しており、現在の標高は2.0～2.5m前後である。

旭川の右岸にある鹿田遺跡周辺は、現在ではほぼ平坦な地形であるが、かつては岡山市街地の北東から南西に向けて何条もの河川が網目状に分流し、その間に大小さまざまな規模の微高地が点在する複雑な地形であった。これまでの調査で、遺跡の北西部には河道が南西に向けて流れていたことが明らかとなっており、鹿田遺跡の主要部分は微高地上に立地する。現在は海岸線から遠く隔たっているが、中世以前には遺跡のすぐ南まで「吉備の穴海」と呼ばれた浅海が迫っていたと考えられている。

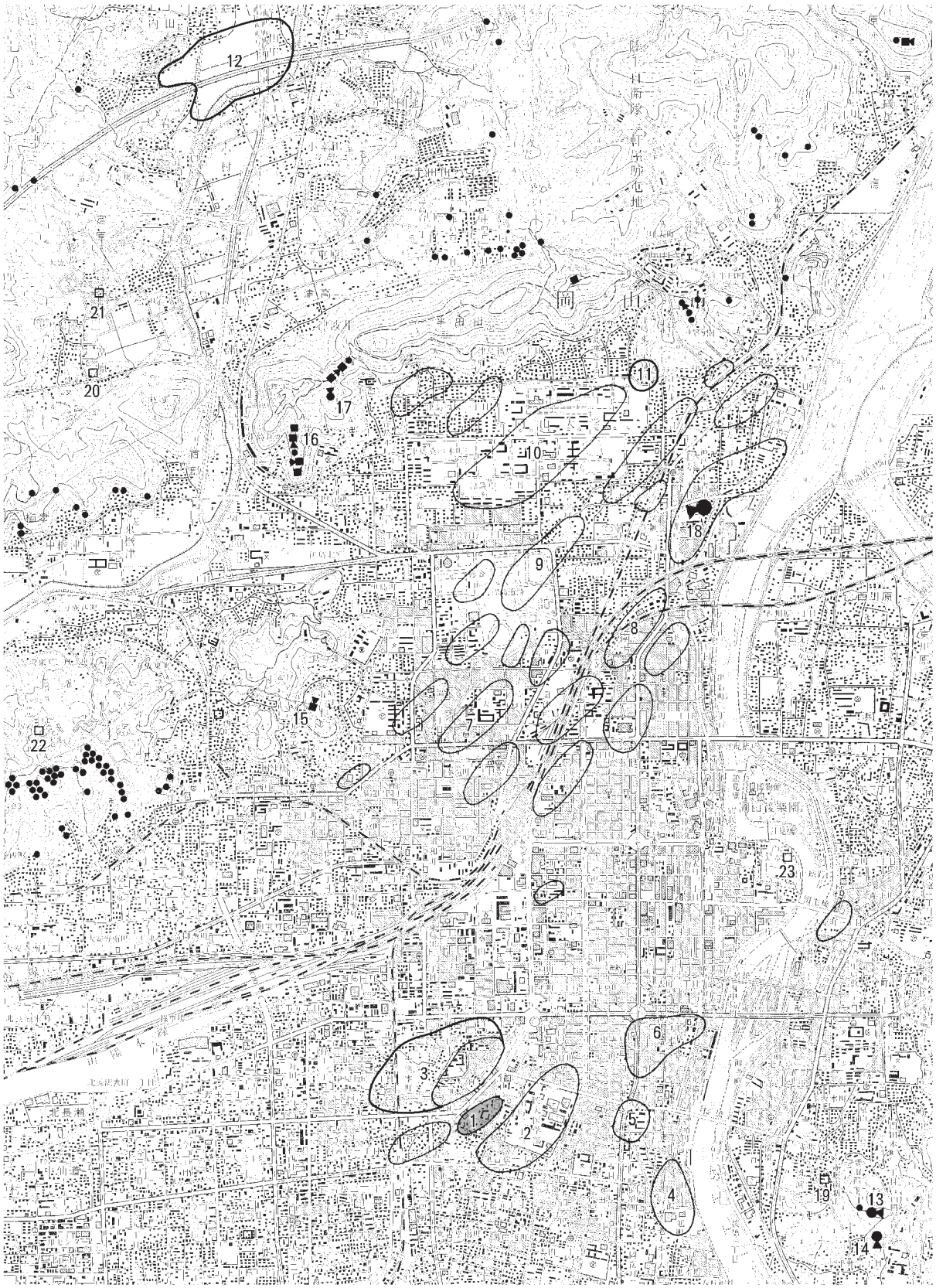
この沖積平野を取り囲むように、龍ノ口山や半田山、操山、京山といった標高80～260mの山々が連なっているが、このうちの操山山塊では後期旧石器時代になってから、人々の営みが始まる。

縄文時代のはじめには、朝寝鼻貝塚や田益田中遺跡など岡山平野北辺の山麓や谷部に生活の場が求められたようであるが、後期に入ると安定した沖積平野への進出がはじまり、晩期にかけて津島岡大遺跡などの集落が形成される。津島岡大遺跡から直線距離で約３㎞南に位置する鹿田遺跡でも、磨滅をあまり受けていない縄文時代中期・晩期の土器片が出土したことから、遺跡の近辺に同時期の遺跡が存在することが推定され、縄文海進以降の沖積化の進行は急速であったことを物語っている。

縄文時代晩期末に半田山の麓ではじまった水田農耕は、弥生時代前期には津島遺跡周辺にまで広がり、中期に南方遺跡群のような大規模な集落を形成する基盤となった。鹿田遺跡の位置する当時の旭川河口付近でも、沖積化の進行に伴って中期前半には北東約１㎞の天瀬遺跡に集落形成の端緒が見られ、中期後半～後期にかけては、鹿田遺跡・二日市遺跡などに広がりを見せる。鹿田遺跡では、これまでの調査で、竪穴住居・井戸・土壙などの遺構が多く検出され、土器を中心に多量の遺物が出土しており、かなり安定した生活の拠点が形成されていたことを窺わせる。遺物の中には、土錘・石錘・製塩土器などの漁労や製塩に関わる遺物が多く出土していることから、海浜近くの立地を活かした生産活動が一定の比重を占めていたと考えられる。

弥生時代後期末以降古墳時代にかけて、半田山丘陵上には、都月坂墳墓群、七つ坑墳墓群などの弥生墳丘墓や前方後円（方）墳が展開し、鹿田遺跡の東側、操山の西端にあたる丘陵上には、操山109号墳、網浜茶臼山古墳などの前方後円墳や円墳などが群在している。前者は津島遺跡を中心とする旭川西岸の集団に、後者は鹿田遺跡のある旭川河口付近の集団に対応する首長墓と考えられている。津島遺跡や上伊福遺跡など平野部の中心に営まれた集落では、弥生時代から順調に発展を遂げ、中期には鉄器生産を行うものも現れてくる。一方、鹿田遺跡は前期末に至って衰退するが、その背景として首長墓系譜の断絶に示されるような集団関係の再編が推定されてい

第１図　遺跡位置図（1/2,000,000）



1　鹿田遺跡（県立岡山病院）　2　鹿田遺跡（岡大医学部）　3　大供本町遺跡　4　二日市遺跡　5　新道遺跡
6　天瀬遺跡　7　上伊福遺跡　8　南方遺跡　9　津島遺跡　10　津島岡大遺跡　11　朝寝鼻貝塚　12　田益田中遺跡
13　網浜茶臼山古墳　14　操山109号墳　15　津倉古墳　16　七つ坑１号墳　17　都月坂１号墳　18　神宮寺山古墳
19　網浜廃寺　20　津高駅家推定地　21　荒神（富原北）廃寺　22　富山城　23　岡山城

第２図　周辺の主要遺跡分布図（1/35,000）

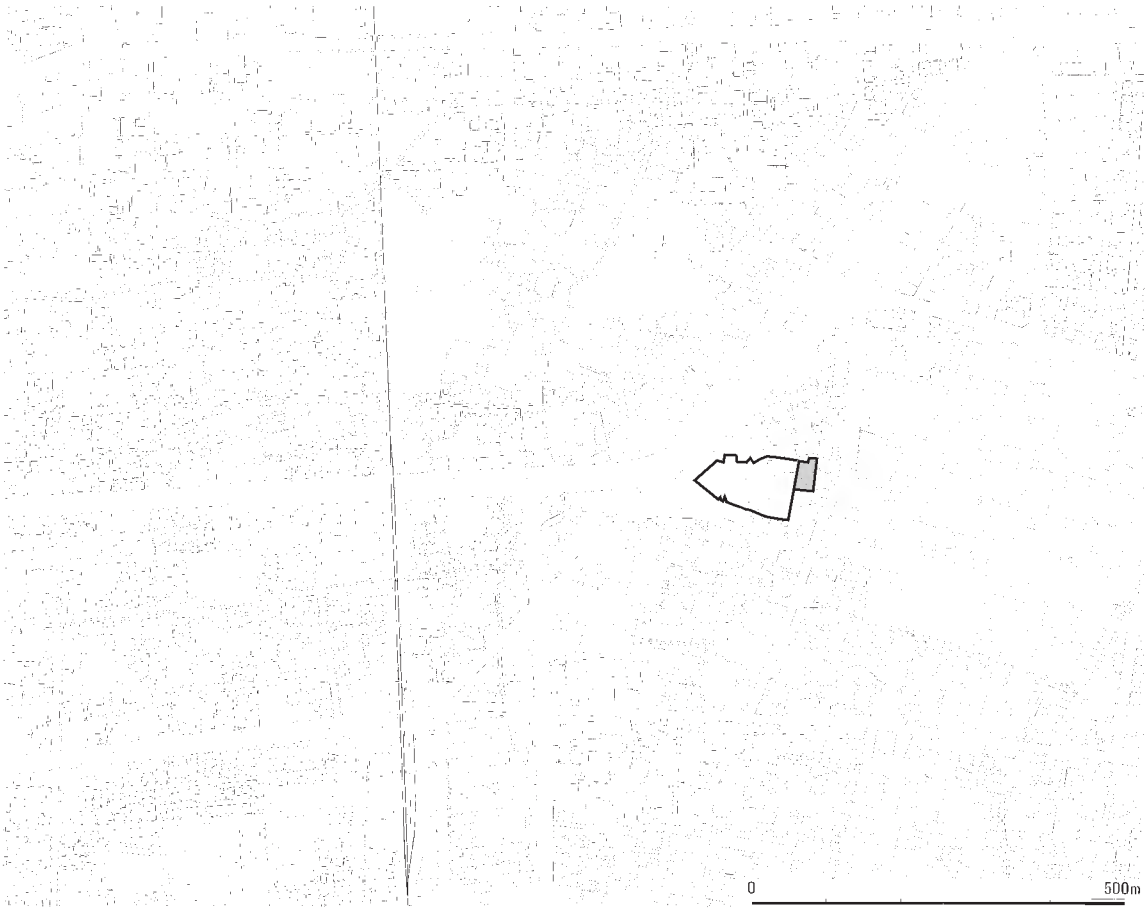
る。後期には再び集落が形成されるものの、その規模は必ずしも大きくない。

飛鳥・奈良時代になると、旭川の両岸の平野に賞田廃寺・幡多廃寺・網浜廃寺・荒神（富原北）廃寺などの古代寺院が集中し、備前国府も想定されることから、この地が備前国の中枢地であったことは確実である。平野部には条里制が施行され、津島遺跡や津島岡大遺跡では条里に関係すると考えられる溝が検出されている。

奈良時代末に藤原北家の荘園として開かれた鹿田荘は、以後摂関家の所領として代々伝えられ、多くの文献資料が残されている。中でも、寛和２年（986）の備前国司藤原理兼による鹿田荘濫妨を伝える記事は、拷掠・損亡された300戸余りの荘司・寄人等の居宅や地子米300石を入れた荘倉の存在を伝えており、かなりの規模の集落が形成されていたことを推定させる。鹿田荘の景観を直接描いた荘園絵図は残っていないが、旭川を挟んで対岸にある新開地を描いた「備前国上道郡荒野荘領地図」（延元元年（1336））に、「鹿田河」と記す旭川沿いに鹿田荘の市の家並みが描かれている。この絵図からは、荘園開発のための大規模な干拓がこの時期進行していたことも読み取ることができる。

鎌倉時代、伊福郷の地頭として来住した松田氏は、南北朝時代には備前守護を務めるまでになるが、その後は備前守護を兼帯した播磨の赤松氏のもと、守護代として勢威を奮い、その一族は鹿田荘を侵略していった。やがて、備前西部を根拠に守護赤松氏や守護代浦上氏と対立し抗争を重ねるが、浦上氏の麾下にあって勢力を伸ばした宇喜多直家に屈し、永禄11年（1568）には滅亡へと追い込まれる。

関ヶ原合戦後、宇喜多氏に替わって入封した小早川秀秋が城内の整備や外堀の掘削などをして城下



第３図　調査地位置図（1/10,000）

町の造営を続けるが、慶長７年(1602)秀秋の急死により、池田氏が入封し、岡山藩が成立する。

江戸時代以降、岡山平野南部は大規模な干拓が進められ、海岸線は南へ後退する。岡山城や城下町の建設などの開発も急激に進められた。鹿田荘の故地である大供村は、庭瀬往来や四国街道が通じる岡山城下の出入口として賑わいを見せる一方で、農村としての景観を永く保ち続けた。明治22年（1889)、内田・西古松・東古松・岡の４村と合併して鹿田村となり、岡山市に編入された大正10年（1921）には岡山医学専門学校・付属医院（現岡山大学医学部・付属病院）が建設されて近隣も都市的開発が進み、市街地化が次第に進行した。

戦後、この地域は岡山市役所をはじめ市水道局や建設省（現国土交通省）岡山工事事務所などの官公署が置かれる一方で、近年は商業地としても新たな展開を見せている。調査の契機となった県立岡山病院は、昭和21年（1946）に設置された岡南病院の業務を拡張して昭和26年（1951）に開設されたもので、今回の整備事業によってその装いを一新し、医療機関として機能の充実を図っている。

さて、鹿田遺跡の発掘調査は、昭和58年（1983）に岡山大学医学部付属病院の施設新築・改築に伴って同大学埋蔵文化財調査室（現埋蔵文化財調査研究センター）により着手されて以来、17次にわたって実施されて来た。その結果、弥生時代に始まる集落の消長が明らかになるとともに、文献でのみ語られて来た鹿田荘の実態を窺わせる考古資料が豊富に得られることとなった。さらに、平成13年（2001）から４次にわたって岡山県教育委員会によって実施された岡山県立病院の整備事業に伴う調査でも、平安時代～鎌倉時代にわたる集落の様子が明らかとなっている。また、その周辺においても岡山県および岡山市教育委員会によって天瀬遺跡や新道遺跡、二日市遺跡、大供本町遺跡などの発掘調査が実施され、これまで資料に乏しかった岡山平野南部の様相が次第に明らかとなりつつある。（河合）

参考文献

『岡山県大百科事典』山陽新聞社 1980

高橋達郎「地形環境」『岡山県史』自然風土 1983

岡山市地名研究会『岡山市の地名』岡山市 1989

中野栄夫「備前国鹿田荘事件」『岡山県史』 古代Ⅱ 岡山県 1990

吉留秀敏・山本悦世ほか「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』３ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988

松木武彦・山本悦世ほか「鹿田遺跡Ⅱ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』４ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1990

松木武彦・山本悦世ほか「鹿田遺跡３」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』６ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993

松木武彦・山本悦世ほか「鹿田遺跡４」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』11 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1997

柳瀬昭彦・杉山一雄ほか「大瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』154 岡山県教育委員会 2001

草原孝典ほか『新道遺跡』岡山市教育委員会 2002

亀山行雄ほか「鹿田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』207 岡山県教育委員会 2007

神谷正義「鹿田本町遺跡」『岡山市埋蔵文化財年報』２ 岡山市教育委員会 2003

神谷正義・柴田英樹「鹿田（ＮＴＴドコモ）遺跡」『岡山市埋蔵文化財年報』３ 岡山市教育委員会 2004

岡山市教育委員会『大供本町遺跡発掘調査現地説明会資料』2006

第２章　調査の経緯と経過

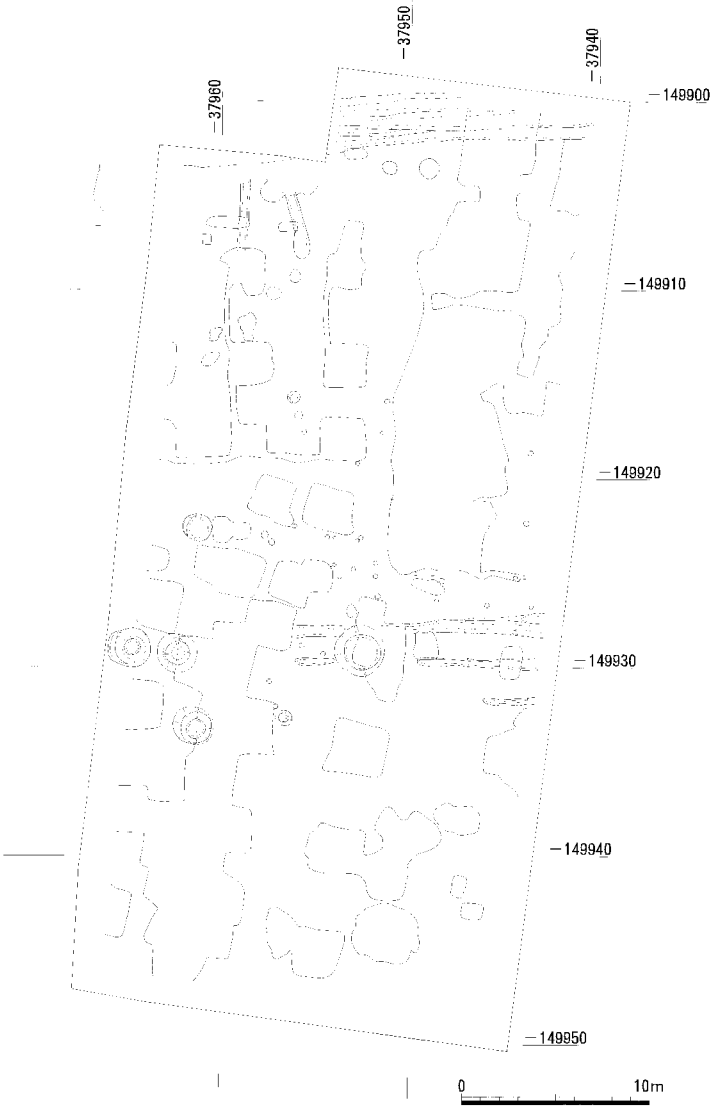
第１節　発掘調査に至る経緯と調査・整理の経過

県立岡山病院の建て替えについて岡山県教育委員会では、岡山県保健福祉部から計画が報告された平成11年度に遺跡の内容や範囲を調べるための確認調査を実施することとした。その結果、工事予定範囲には古代・中世を中心とする遺跡の存在が確認されたため（『岡山県埋蔵文化財報告30』）遺跡の取り扱いについて関係機関と協議し、やむを得ず工事によって影響を受ける範囲について本調査を実施することとした。工事計画のうち第Ⅰ・Ⅱ期整備事業に伴う本調査は平成13・14・16年度に実施し、その成果については報告書を刊行している（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告207』）。

本報告書に掲載する第Ⅲ期整備事業は、平成16年度に新たに計画案が示された事業である。事業案に示された範囲に建築されている建物については昭和62年に立会調査が行われており遺跡の存在が確認されていたことから（『岡山県埋蔵文化財報告19』）、遺跡の取り扱いについて関係機関と協議した結果、遺跡に影響を与える範囲について本調査を実施することとなった。

本調査期間は、既存の建物の撤去が平成17年度末に完了することと、新施設建築のための工事に必要な期間などから平成18年度４～６月に実施することとした。（平井）

第４図　調査区配置図（1/1,200）



第５図　検出遺構全体図（1/400）

発掘調査は、平成18年４・５月に調査員３名、６月に調査員２名を配置し全面調査を実施した。調査については、排土・排水の都合で調査区を縦長に２分割して行い、そのうち東側を１区、西側を２区とし、１区から順次調査を行った。調査地は、全域にわたって建物の基礎等による攪乱を被り、特に北東隅はデイケアセンターの基礎が深く入り込んでおり、遺構の残存状況はきわめて不良であった。しかし、攪乱を被っていない箇所を中心として、基礎が入っている箇所についても、井戸などの深い遺構の検出を目的に精査を行った結果、調査区の中央から北にかけて、平安〜鎌倉時代にわたる井戸・土壙・溝などの遺構を検出することができた。

出土遺物・調査記録の整理作業および報告書作成は、調査終了後の７月から10月に調査員１名を配置し、文化財センターにおいて実施し、年度末に報告書を刊行した。　（河合）

調査日誌抄

平成18年

４月３日（月）　発掘調査準備開始
４月４日（火）　１区表土掘削開始
４月７日（金）　資材搬入、１区発掘開始
４月13日（木）　測量基準杭打設
５月16日（火）　２区表土掘削開始
５月18日（木）　１区発掘終了、２区発掘開始
５月22日（月）　測量基準杭打設
５月29日（月）　安全衛生委員現場巡視
６月１日（木）　岡山理科大学富岡助教授現地指導
６月14日（水）　２区発掘終了
６月16日（金）　資材撤収
６月23日（金）　現地作業終了
６月30日（金）　発掘調査終了
７月３日（月）　報告書作成開始
10月31日（火）　報告書作成終了

第２節　発掘調査および報告書作成の体制

本報告書に所収の鹿田遺跡は、平成18年度に全面調査、整理・報告書作成を実施した。次に、その体制を記す。

平成18年度

岡山県教育委員会

教 育 長　　門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長　　神田　益穂

文化財課

課　　長　　高畑　知功

参　　事　　田村　啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長）

光永　真一

主　　任　　小林　利晴

主　　任　　金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　松本　和男

次　　長（総務課長）　安西　正則

参　　事　　岡田　　博

副 参 事　　中島　謙次

＜総務課＞

総括副参事（総務班長）若林　一憲

主　　任　　小川　紀久

＜調査第三課＞

課　　長　　平井　泰男

（調査担当）

総括副参事（第一班長）内藤　善史

副 参 事　　山磨　康平

（調査担当）

主　　事　　河合　　忍

（調査・報告書担当）

協力者（50音順　敬称略）

伊藤　晃（中近世備前焼研究会会長）、 山本悦世（岡山大学埋蔵文化財センター）

表１　文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

岡山県文書番号　日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	目　的	届出者	期　間	主な指示事項
教　文　埋 第47号 H18.4.5	集落跡 鹿田遺跡	岡山市鹿田本町3－16	1,060	県立岡山病院 第Ⅲ期整備事業	岡山県知事　石井正弘	H18年度上半期	発掘調査

埋蔵文化財発掘の報告（法第99条）

文書番号　日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	原　因	報告者	担当者	期　間
岡　古　調 第2002号 H18.4.3	集落跡 鹿田遺跡	岡山市鹿田本町3－16	1,060	県立岡山病院 第Ⅲ期整備事業	岡山県古代吉備文化財センター　所長	平井泰男　山磨康平 河合　忍	H18.4.1～ H18.6.30

埋蔵文化財発見通知（法第100条）

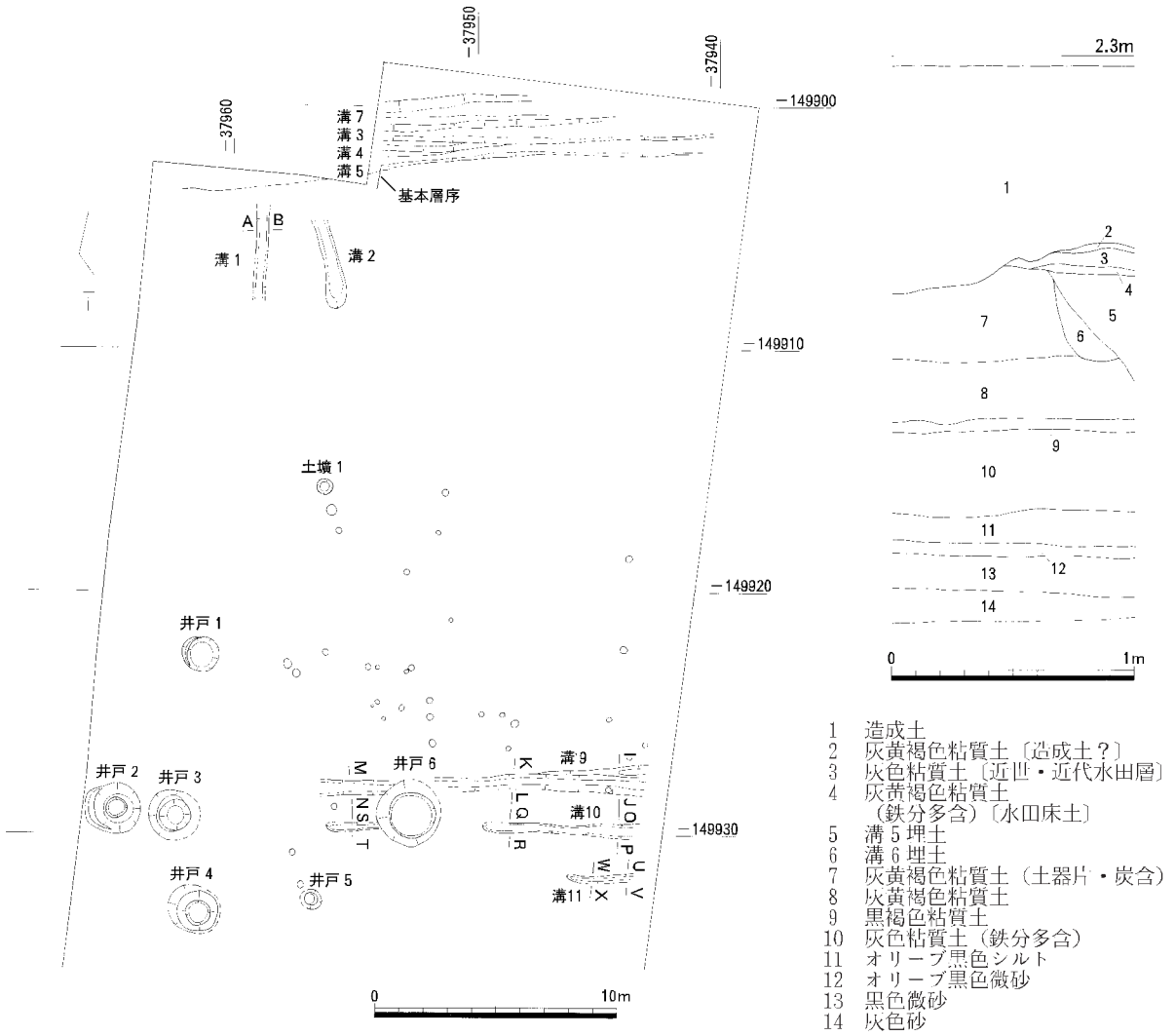
岡山県文書番号　日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教　文　埋 第103号 H18.6.26	土師器・須恵器・陶磁器・土製品・金属製品・木器・獣骨　14箱	岡山市鹿田本町3－16 鹿田遺跡	H18.4.1～ H18.6.23	岡山県教育委員会 教育長　門野八洲雄	岡山県知事　石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概要

遺跡は、県立岡山病院の西半部にあたる。当整備事業以前に病院施設が存在した場所であり、調査はこの既存の建物を撤去した後、地表下80㎝までの造成土を重機によって除去した後に着手した。

厚さ70～100㎝の造成土の下には、部分的に近世・近代の水田層が確認される。その水田の床土を除去した標高1.4ｍ付近で、平安～鎌倉時代の井戸６基、土壙１基、溝11条などを検出した。これらは、撹乱の影響もあってか、調査区北部と中央部に偏って存在するが、中央部で検出された溝から南において、柱穴が存在しないことから判断すれば、本来のあり方を示すものと考えられる。これらの基盤となる砂質土の下層は、標高0.5ｍあたりからシルトと砂の互層となっている。　　（河合）



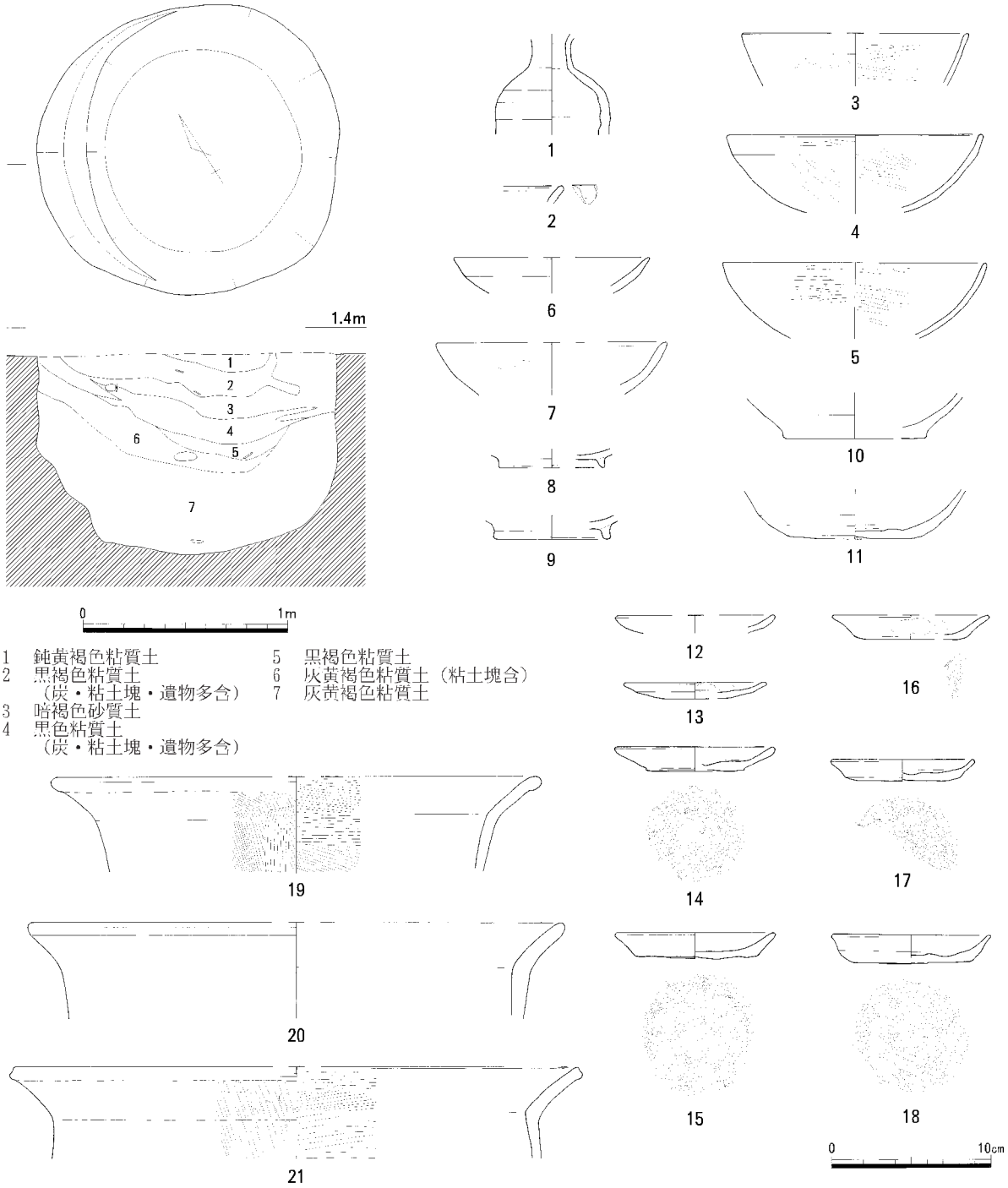
第６図　遺構全体図（1/300）・基本層序（1/30）

第２節　遺構・遺物

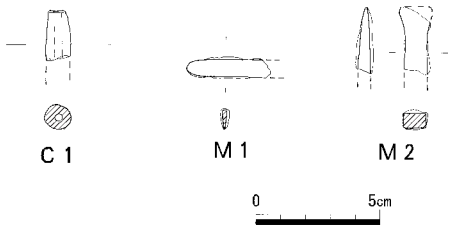
１　井戸

井戸１（第６～８図、写真１、図版２）

調査区の中央西側で検出した井戸で、井戸３の北５ｍに位置する。掘り方の平面形は、長さ148㎝、



第７図　井戸１（1/30）・出土遺物①（1/4）



第８図　井戸１出土遺物②（1/3）

写真１　井戸１出土粘土塊

幅139cmのほぼ円形である。検出面からの深さは96cmを測り、底面の海抜高は29cmを測る。

埋土は大きく上層（１～６層）と下層（７層）に大別できる。上層からは、炭・粘土塊や土器が多く検出されたが、そのうち２・４層で顕著であった。粘土塊には、大きさが10cmを超えるものが含まれ、その中にはナデで面を持つものや土器片が含まれているものもある。

出土遺物のうち、土器類のほとんどが上層出土のものであり、須恵器の瓶１、近江産の可能性がある緑釉陶器の椀２、黒色土器の椀３～５、土師器の椀６～９、杯10・11、皿12～18、鍋19～21がある。黒色土器は内外面にミガキが認められる。土師器皿で主体を占めるのは、底部調整にヘラ切りもしくはヘラおこしを行うものである。そのうち、18は中心近くまでヘラケズリが認められる。土師器鍋19・21には煤が付着している。出土土器類の組成では、土師器の杯に比べて、皿が多い印象がある。そのほか、土製品では土錘Ｃ１、鉄製品では刀子と考えられるものＭ１、鉄釘Ｍ２が認められる。鉄滓は上層・下層からそれぞれ少量認められ、モモ核については下層から８個体分が出土した。

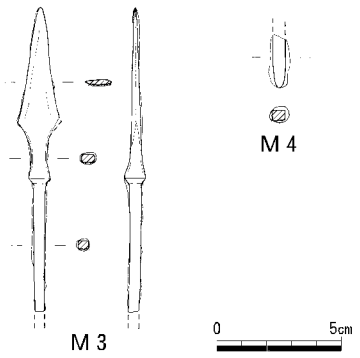
時期は、出土遺物から10世紀末～11世紀前半と考えられる。（河合）

井戸２（第６・９～11図、巻頭写真１、図版２）

調査区の中央西側で検出した井戸で、井戸３に隣接する。掘り方の平面形は、長さ222cm、幅198cmのほぼ円形である。検出面からの深さは123cmを測り、底面の海抜高は14cmを測る。

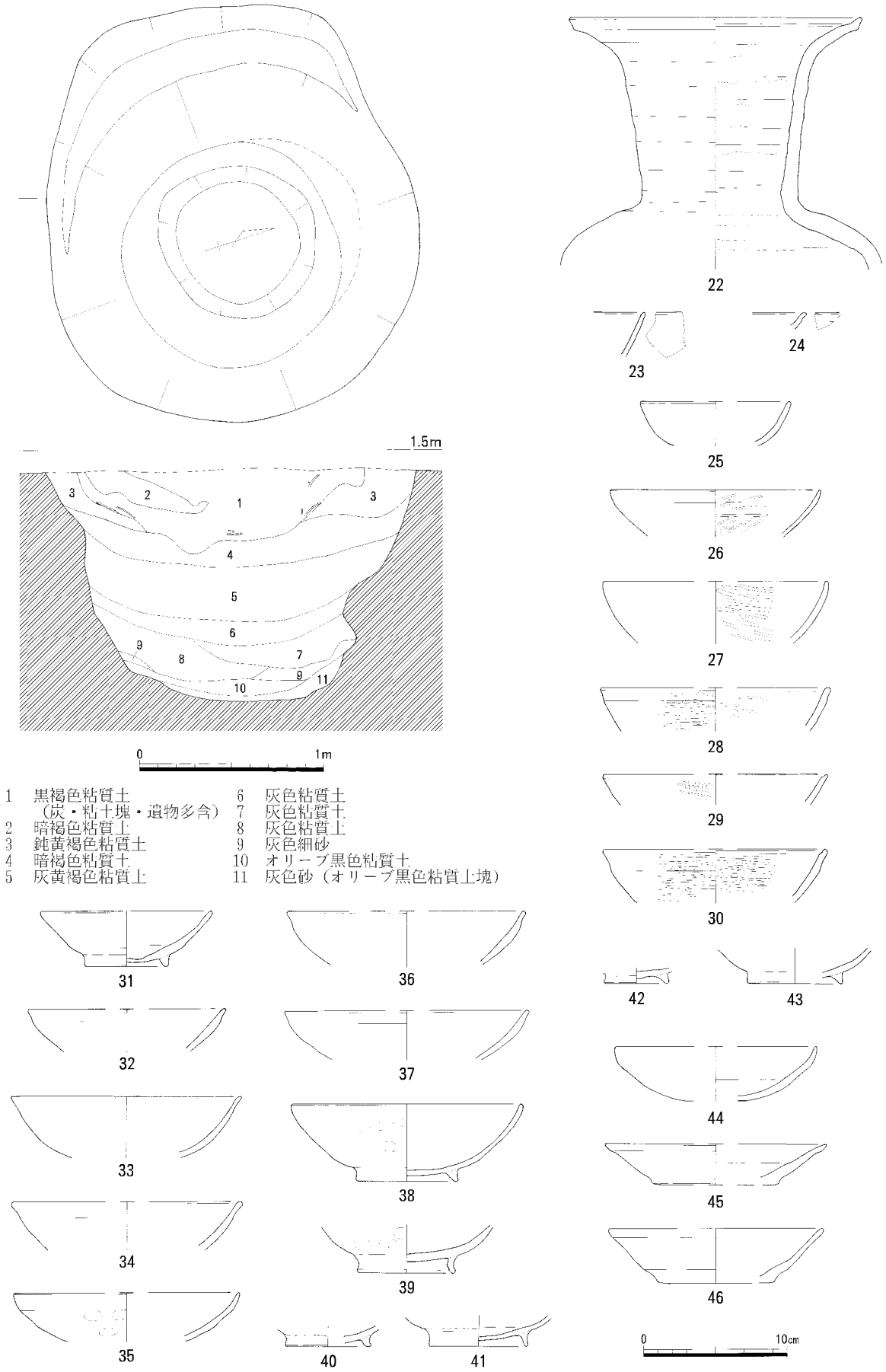
埋土は大きく上層（１・２層）と下層（３～７層）に大別できる。上層からは、炭・粘土塊・土器が多く検出され、被熱痕跡のある石も確認されたことから、付近で火を使用した行為を想定できる。出土遺物のうち、須恵器の長頸瓶22と土師器の鍋56は１層の底面に張り付く、または置かれたような状態で出土した。井戸の底面は円形に一段窪んでおり、曲物の井筒が設置されていた可能性がある。

出土遺物のほとんどが上層出土のものである。土器類では、須恵器の長頸瓶22、椀23、緑釉陶器の皿24、黒色土器の椀25～29・31・32、瓦器椀30、土師器椀33～43、杯44～46・48・49、皿47・50～55、鍋56・57があり、椀が多い。そのうち、22は口縁部がわずかに上方に屈曲し、面をもつ。33は土師器であるが、焼きが非常によく、須恵質である。土師器椀のうち、34・36・38・39・42・43は灰白色を呈し、口縁部付近を屈曲させる特徴がある。56・57は内外面共にハケ調整を施す。そのほか、鉄製品の鏃Ｍ３、釘Ｍ４がある。Ｍ３は現存長12.2cmを測り、基部を欠損している。また、鉄滓も認められる。



第９図　井戸２出土遺物①（1/3）

時期は、出土遺物から10世紀末～11世紀前半に比定される。なお、上層出土のモモ核（試料１）と炭化物（試料２）について、放射性炭素年代測定を実施した。付載２を参照されたい。（河合）



第10図　井戸２（1/30）・出土遺物②（1/4）

第11図　井戸２出土遺物③（1/4）

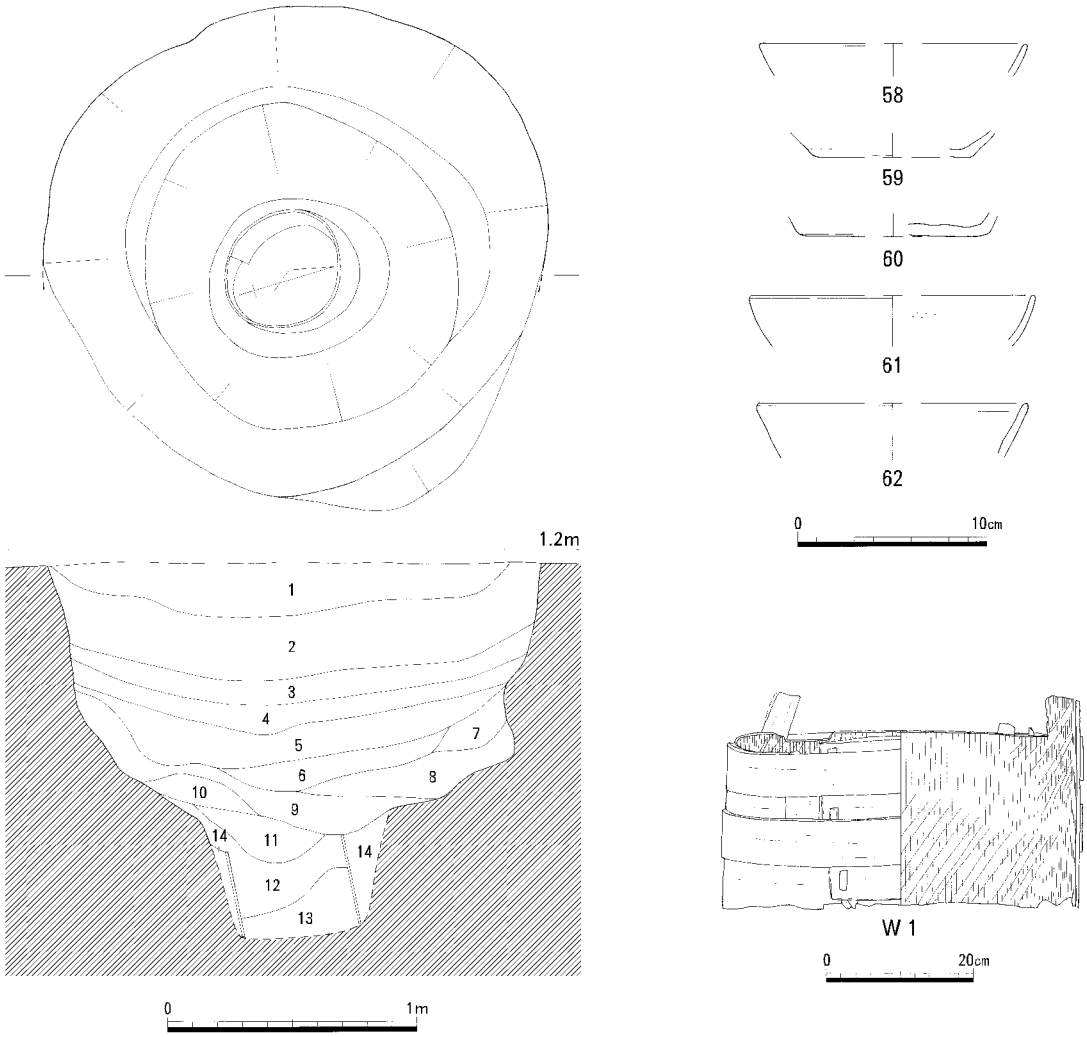
井戸３（第６・12図、図版２・３・10）

調査区の中央西側で検出した井戸で、井戸２に隣接する。掘り方の平面形は、長さ200㎝、幅195㎝のほぼ円形である。底部は湧水のため、確認ができなかったが、底部に据えられた径47㎝、高さ35㎝の曲物**Ｗ１**から判断すると、検出面からの深さは約148㎝であり、底面の海抜高は-36㎝を測る。**Ｗ１**は調査時にかろうじて原形を保っていたが、保存状態は不良で取り上げ時に破損した。樹種はヒノキである。埋土は14層に分層され、大きく上層（１～３層）と下層（４～14層）に大別できる。

出土遺物には、須恵器椀**58**、杯**59・60**、黒色土器椀**61**、土師器杯**62**のほか土師器鍋片が認められた。そのほか、モモ核が５点が下層から出土した。時期は、10世紀末～11世紀前半に比定される。（河合）

井戸４（第６・13図、図版３）

調査区の中央西側で検出した井戸で、井戸３の南南東２ｍに位置する。掘り方の平面形は、長さ202㎝、幅179㎝のほぼ円形である。検出面からの深さは127㎝を測り、底面の海抜高は-14㎝を測る。



1　鈍黄褐色粘質土
2　灰黄褐色粘質土
3　灰黄褐色粘質土
4　褐灰色粘質土
5　褐灰色粘質土
6　灰色粘質土
7　灰色細砂
8　灰色粘質土
9　灰色細砂
10　オリーブ黒色粘質土
11　オリーブ黒色粘質土
12　灰色砂（オリーブ黒色粘質土混）
13　オリーブ黒色砂
14　灰色砂

第12図　井戸３（1/30）・出土遺物（1/4・1/10）

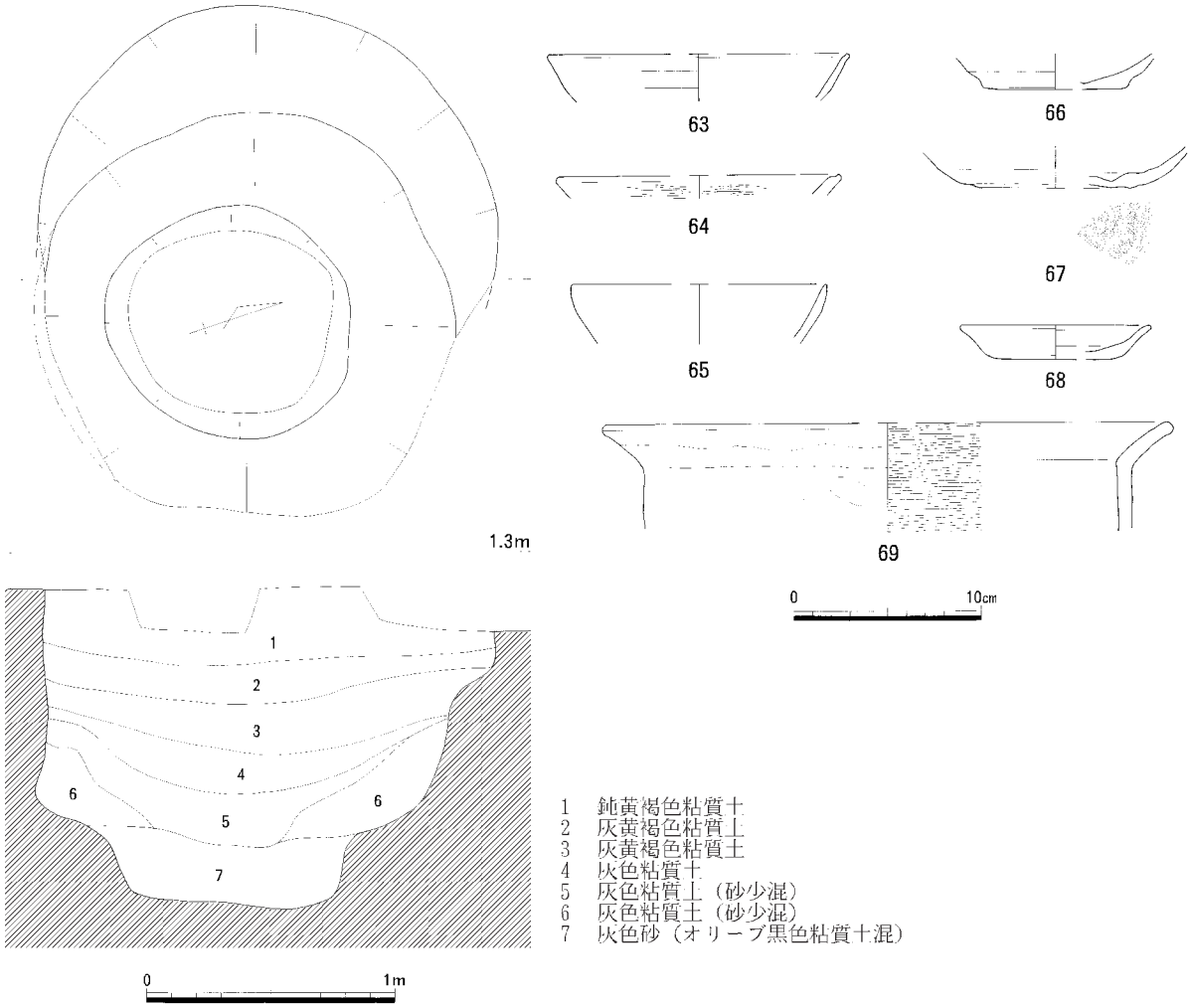
埋土は７層に分層され、大きく上層（１・２層）と下層（３～７層）に大別できる。底面は円形に一段窪んでおり、曲物の井筒が設置されていた可能性がある。

出土遺物には、黒色土器椀**63**、瓦器椀**64**、土師器杯**65**～**67**、灯明皿**68**、鍋**69**がある。**64**は口縁部内面に段を有する。出土遺物のほとんどが上層出土のものであるが、**69**のみ下層から出土している。そのほか、上層からモモ核６点が、下層から獣骨片がそれぞれ確認された。

時期は、出土遺物から10世紀末～11世紀前半に比定される。　（河合）

井戸５（第６・14図、図版３・９・10）

調査区の中央付近で検出した井戸で、井戸４の東３ｍに位置する。掘り方の平面形は、長さ80㎝、幅76㎝のほぼ円形である。底部は湧水のため、確認ができなかったが、底部に据えられた径42.5㎝、高さ31㎝の曲物**Ｗ２**から判断すると、検出面からの深さは約166㎝であり、底面の海抜高は-42㎝を測る。埋土は７層に分層され、大きく上層（１～４層）と下層（５・６層）に大別できる。３層からは



第13図　井戸４（1/30）・出土遺物（1/4）

炭が多く検出された。５層は有機物を多く含む層である。

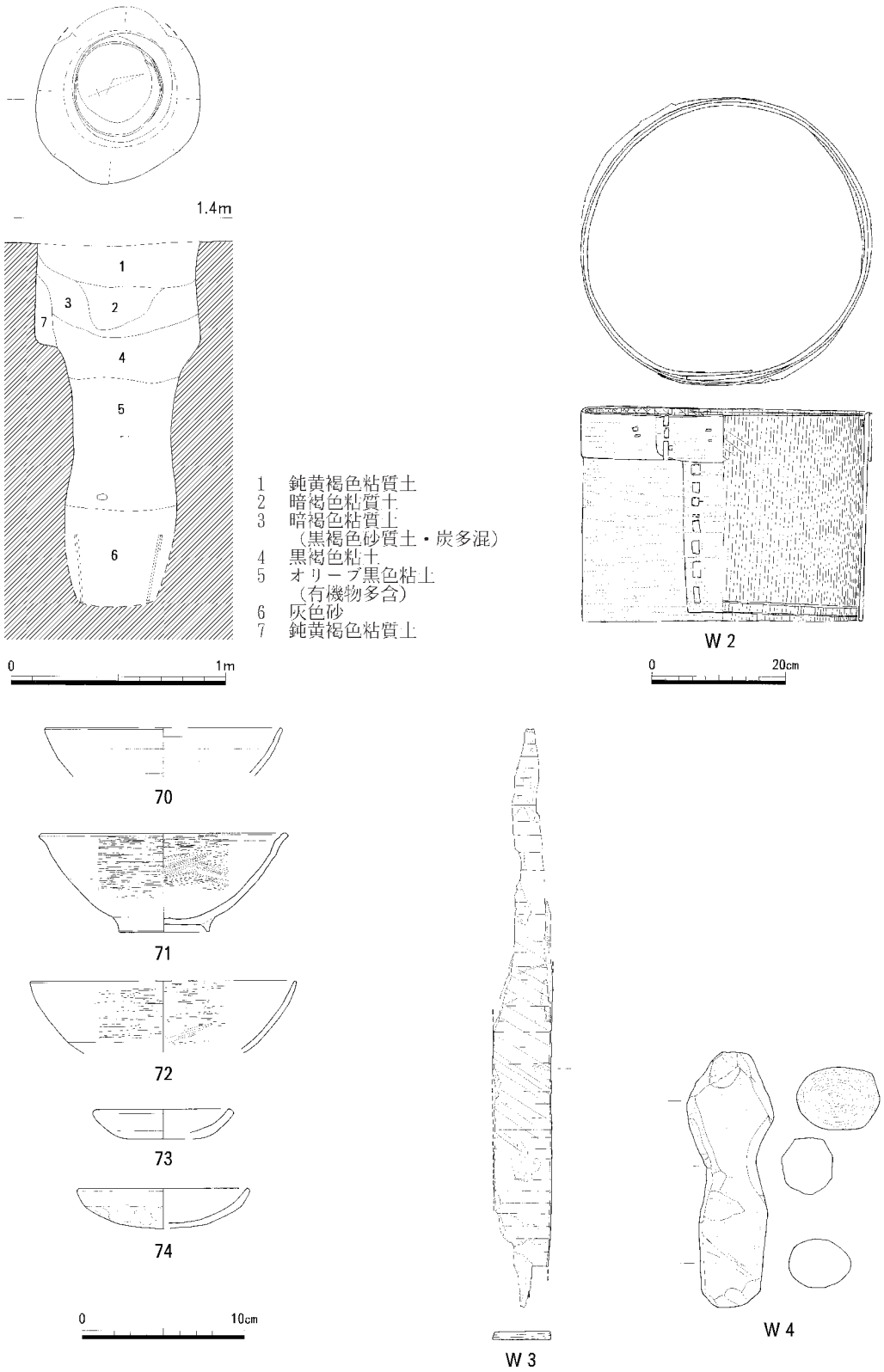
出土遺物には、須恵器椀**70**、黒色土器椀**71**・**72**、土師器皿**73**・**74**、鍋**69**のほか土師器鍋片が認められた。**71**は図上復元である。**74**は底部外面に指押さえが観察できる。木器では曲物**Ｗ２**・**Ｗ３**のほか、人形の可能性がある**Ｗ４**がある。**Ｗ２**の樹種はヒノキ、**Ｗ４**の樹種はクスノキ属である。これらの木製品は、モモ核４点とともに下層から出土している。**Ｗ２**と**Ｗ３**が別個体であることから、曲物を重ねて井戸側として用いていた可能性がある。そのほか、鉄滓と青銅製品片が埋土中から確認された。

時期は、出土遺物から10世紀末～11世紀前半に比定される。なお、５層埋土について種実鑑定を行ない、多種類の種実が確認された。詳細は付載１を参照されたい。　（河合）

井戸６（第６・15・16図、図版３・４・９）

調査区の中央付近で検出した井戸で、井戸４の東３ｍに位置する。溝９・10を切っている。掘り方の平面形は、長さ279㎝、幅254㎝のほぼ円形である。検出面からの深さは136㎝を測り、底面の海抜高は-21㎝を測る。埋土は７層に分層され、大きく上層（１～３層）と下層（４～13層）に大別できる。３層には焼石とともに多くの遺物が含まれており、**92**～**94**・**96**・**98**・**99**・**101**～**105**などが出土した。７層には曲物**Ｗ５**・曲物底**Ｗ６**などが出土したほか、土師器椀**82**・**83**がほぼ完形で出土している。

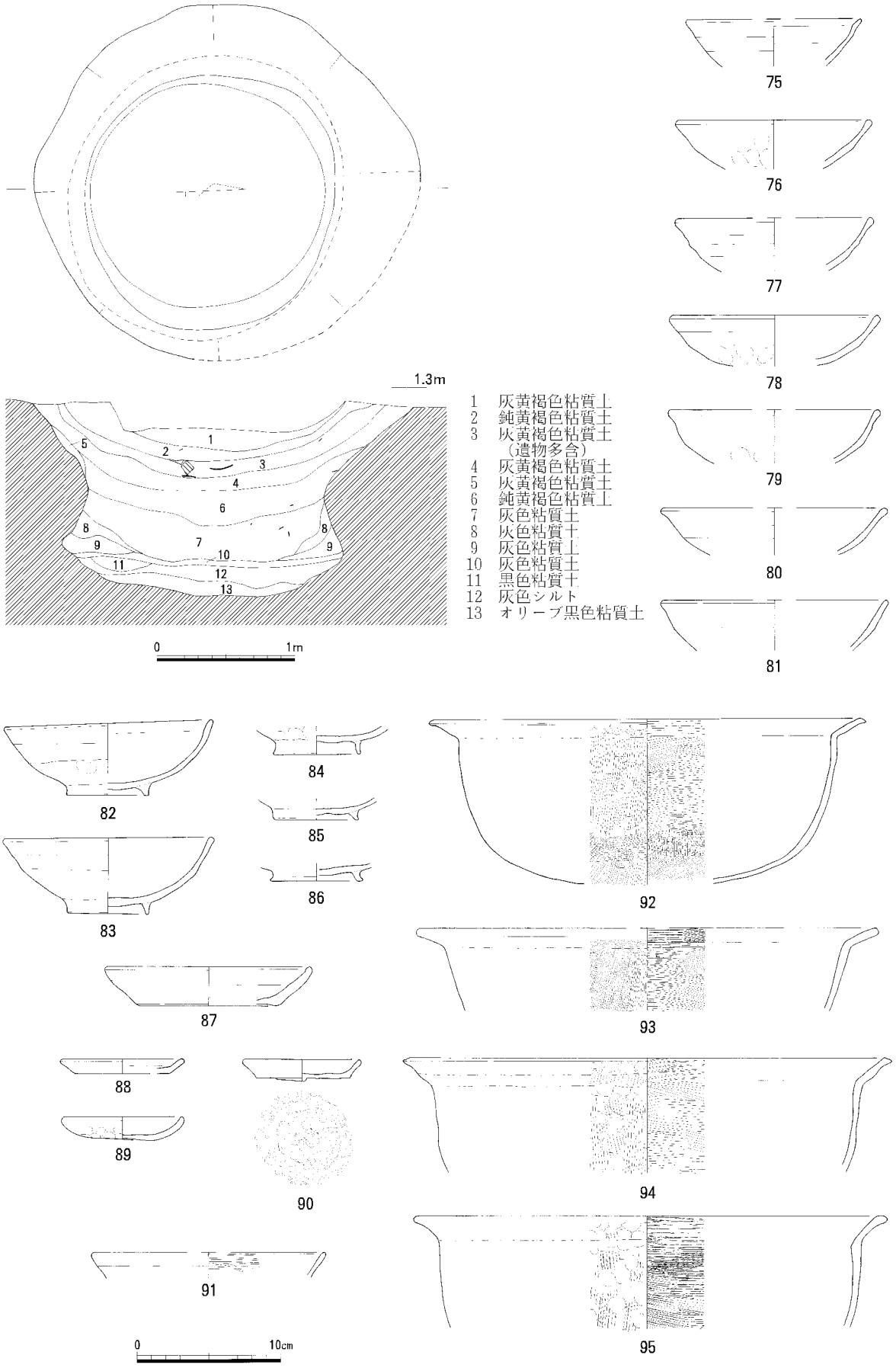
出土遺物には、須恵器椀**75**、土師器椀**76**～**86**、杯**87**、皿**88**～**90**、瓦器椀**91**、土師器鍋**92**～**95**、竈**96**、



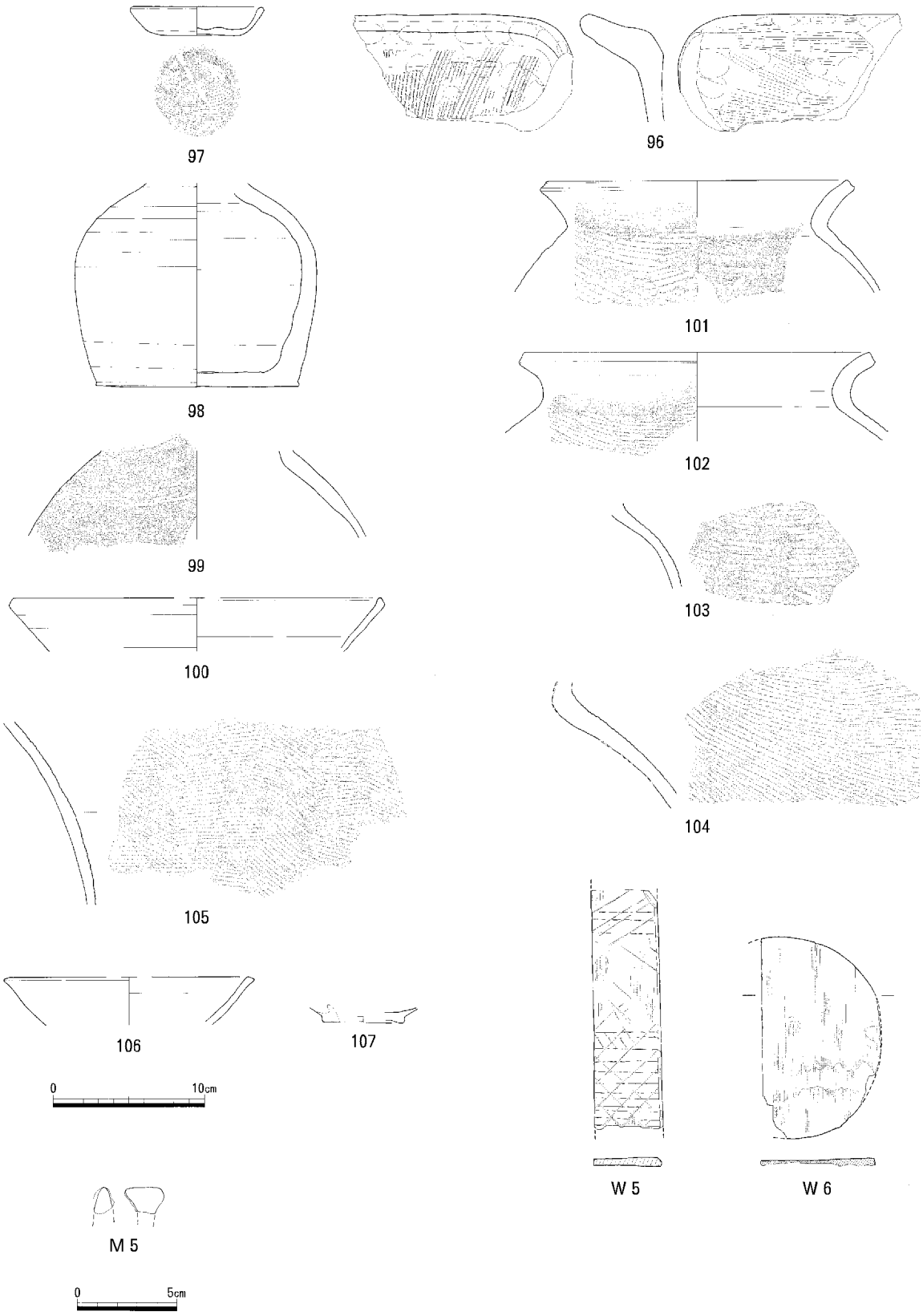
第14図　井戸５（1/30）・出土遺物（1/10・1/4）

備前焼皿97、壺98・99、鉢100、亀山焼甕101～104、東播系須恵器甕105、白磁椀106、皿107が認められた。さらに、鉄釘Ｍ５と鉄滓が上層から出土した。

時期は、出土遺物から12世紀末～13世紀初頭に比定される。（河合）



第15図　井戸６（1/40）・出土遺物①（1/4）

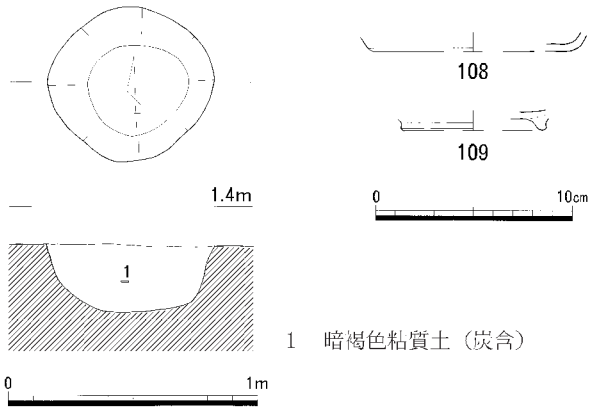


第16図　井戸６出土遺物②（1/4・1/3）

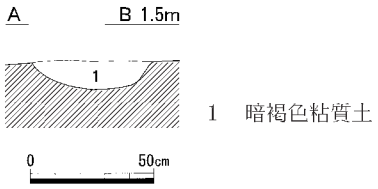
2　土壙

土壙１（第６・17図、図版４）

調査区の北西部で検出した土壙で、井戸１の北東7.5mに位置する。掘り方の平面形は、長さ66㎝、幅60㎝のほぼ円形である。検出面からの深さは26㎝、底面の海抜高は98㎝を測る。出土遺物および埋土から、遺構の時期は10世紀末～11世紀前半に比定される。　（河合）



第17図　土壙１（1/30）・出土遺物（1/4）

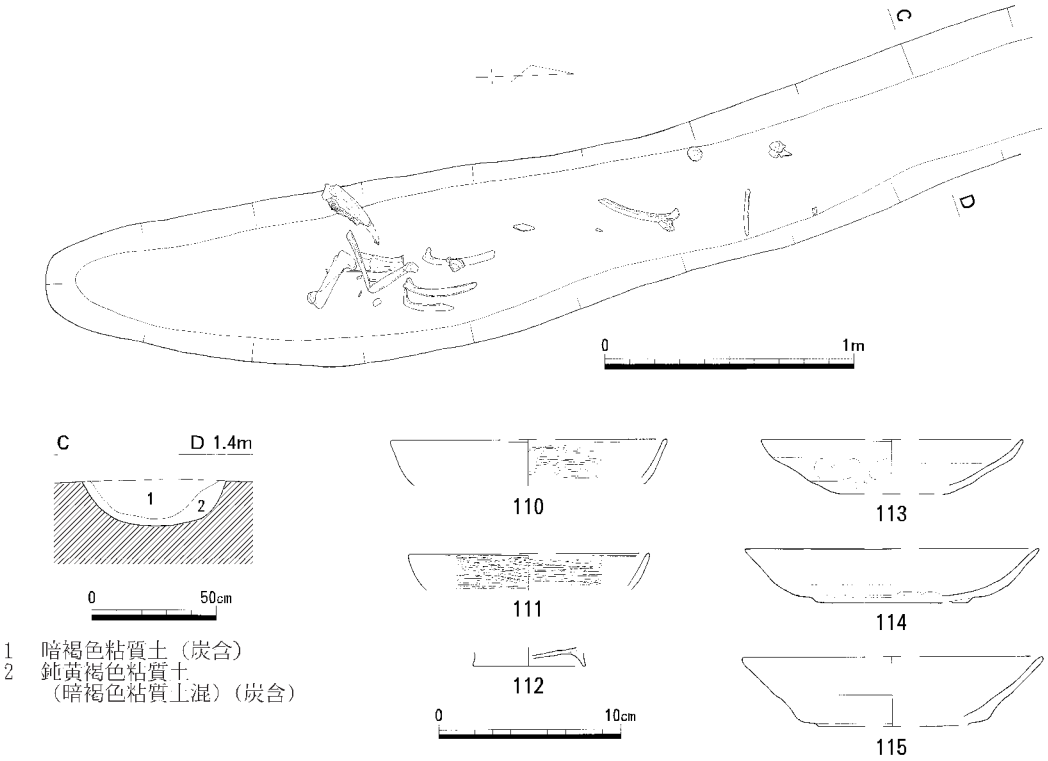


第18図　溝１（1/30）

3　溝

溝１（第６・18図）

調査区の北西部隅で検出した南北方向の溝で、約２m東の溝２とはほぼ平行し、溝３～８とは直交



第19図　溝２（1/30）・出土遺物（1/4）

する。幅は46cmで、検出面からの深さは11cmを測る。出土遺物は、須恵器・土師器片のほか、獣骨がわずかに出土している。埋土から、遺構の時期は10世紀末～11世紀前半に比定したい。（河合）

溝２（第６・19図、巻頭写真１、図版４）

調査区の北西部隅で検出した南北方向の溝で、約２ｍ東の溝２とはほぼ平行し、溝３～８とは直交する。幅は56cmで、検出面からの深さは19cmを測る。出土遺物には、多く出土した獣骨のほか、黒色土器椀**110・111**、土師器椀**112**、杯**113～115**および須恵器の杯片、土師器の鍋片がある。

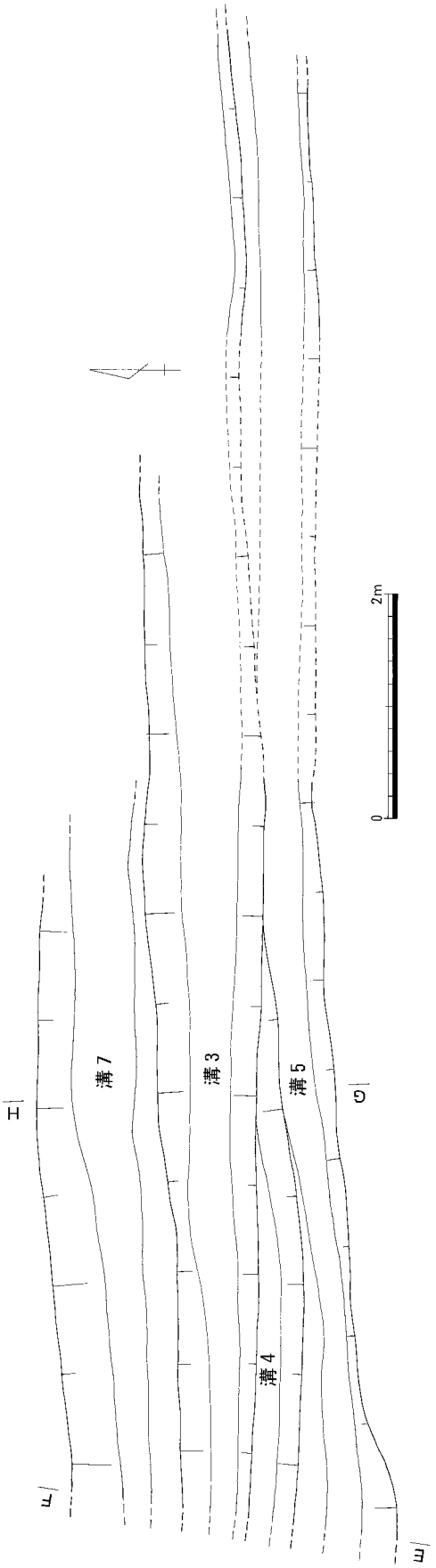
獣骨については、富岡直人氏に鑑定を依頼した。その結果、壮年のウシであり、全ての部位が残っていないことなどから、埋葬ではなく、この地点付近で解体され廃棄された可能性が高い。骨格の表面の保存が良好なことから、比較的早い段階で土砂に埋もれた可能性がある。などの教示を受けた。時期は、出土遺物から10世紀末～11世紀前半に比定される。（河合）

溝３～８（第６・20～23図、巻頭写真１、図版４）

調査区の北辺で検出した遺構で、複数の溝が重複している。溝の方向は全て東西方向で、やや南西に振っている。これは、現地表に残る地割りの方向と一致しており、注目される。

溝の重複関係から見て、同時併存はなかったものと考えられる。位置を少しずつずらしながらも、同じ位置で何度も掘り直したものと判断され、溝の位置が現在の用地境付近であることも踏まえると、この溝群は土地を区画する役割を果たしていたことが推察される。溝の新古は、断面から判断すると、古い順から溝８→溝７→溝４→溝３と溝６→溝５→溝４→溝３が考えられるが、溝７・溝８と溝５・溝６との新古は明らかではない。埋土からは、水が常時流れていたような痕跡がみられず、溝を掘り直す際に、前の溝を意図的に埋めた可能性が考えられる。

溝３が廃絶した後も溝状にたわんでおり（５・６層）、区画の役割は継続していたと考えられる。

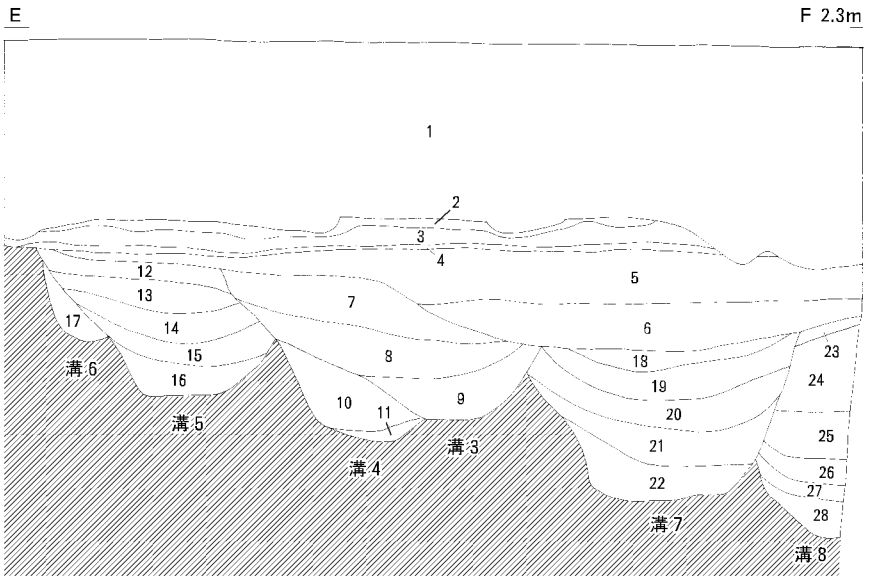


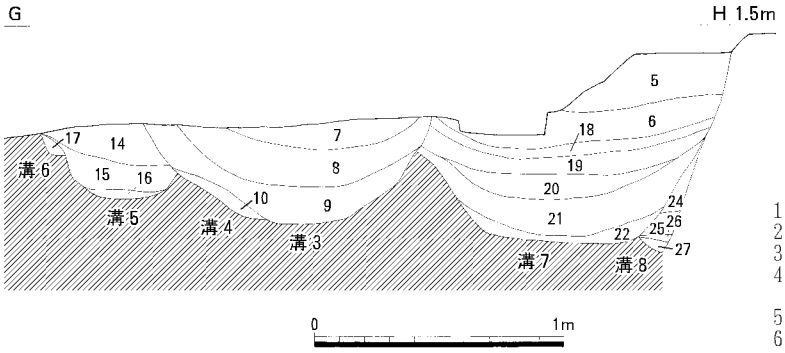
第20図　溝３・４・５・７（1/60）

出土遺物は、それぞれの溝とその上層（５・６層）から確認された。遺構ごとに説明したい。ただし、調査時点で流路の大部分が重複する溝３と溝４については、掘り分けが十分にできなかったため、まとめて報告することとする。

溝３・４からは、土師器椀116～124、皿125、脚台126、鍋127、瓦器椀128・129、白磁椀130・131、亀山焼甕片、砥石Ｓ１、土錘Ｃ２のほか、ウシまたはウマの可能性のある獣骨の四肢骨および鉄塊が出土した。また、溝３から出土した種実を鑑定した結果、トウガンであることが判明した。溝５からは、土師器の椀132、高台杯133、東播系須恵器こね鉢片（後述する150と同一個体の可能性が高い）、同甕片、土錘Ｃ３、鉄滓が確認された。溝７からは、土師器の椀134、皿135、東播系須恵器すり鉢136、白磁椀137、須恵器椀片、亀山焼甕片、土師器鍋片、丹波焼？甕片などのほか、土錘Ｃ４、鉄釘片、鉄滓が認められる。さらに、イチョウに似た形態をもつ種子も出土しているが、詳細は不明である。溝８からは、土師器の椀138と須恵器片が出土している。溝６からは出土遺物が認められなかった。

溝３～８の上層（５・６層）からは、土師器の椀139～143、鍋脚部144、竈145・146、瓦器椀147・



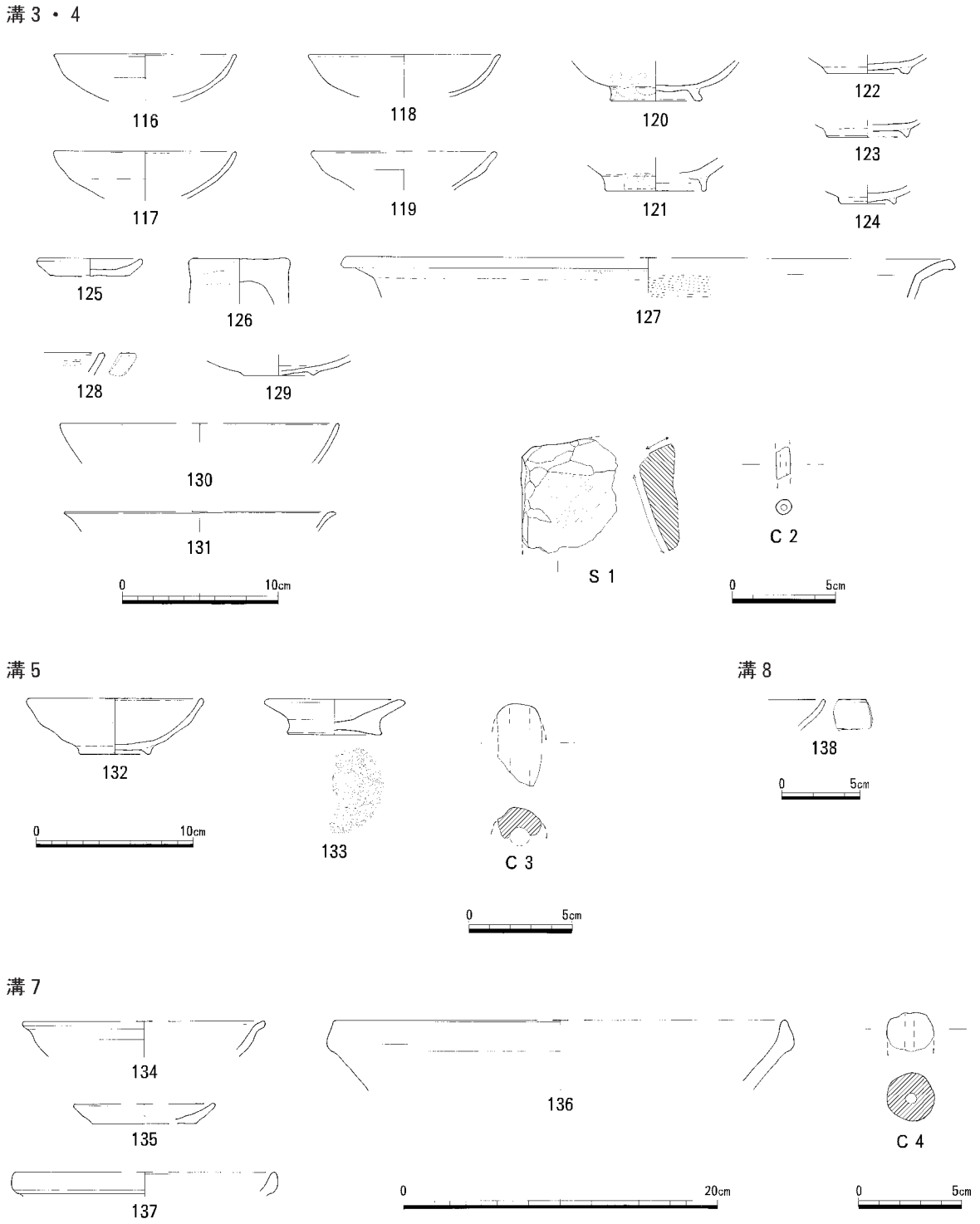


1　造成土
2　灰黄褐色粘質土〔造成土？〕
3　灰色粘質土〔近世・近代水田層〕
4　灰黄褐色粘質土（鉄分多含）〔水田床土〕
5　灰黄褐色粘質土
6　鈍黄褐色粘質土
7　灰黄褐色粘質土〔溝３埋土〕
8　灰黄褐色粘質土〔溝３埋土〕
9　黒褐色粘土〔溝３埋土〕
10　黒褐色粘土〔溝４埋土〕
11　灰黄褐色粘土〔溝４埋土〕
12　鈍黄褐色粘質土〔溝５埋土〕
13　灰黄褐色粘質土〔溝５埋土〕
14　灰黄褐色粘質土〔溝５埋土〕
15　黒褐色粘土〔溝５埋土〕
16　黒褐色粘土（鈍黄褐色細砂多混）〔溝５埋土〕
17　暗褐色粘質土〔溝６埋土〕
18　灰黄褐色粘質土〔溝７埋土〕
19　鈍黄褐色粘質土〔溝７埋土〕
20　灰黄褐色粘質土〔溝７埋土〕
21　灰黄褐色粘土〔溝７埋土〕
22　黒褐色粘土（細砂混）〔溝７埋土〕
23　灰黄褐色粘質土〔溝８埋土〕
24　灰黄褐色粘質土〔溝８埋土〕
25　黒褐色粘質土（鉄分含）〔溝８埋土〕
26　黒褐色粘土（細砂混）〔溝８埋土〕
27　黒褐色粘質土（鉄分・マンガン多含）〔溝８埋土〕
28　灰色粘土〔溝８埋土〕

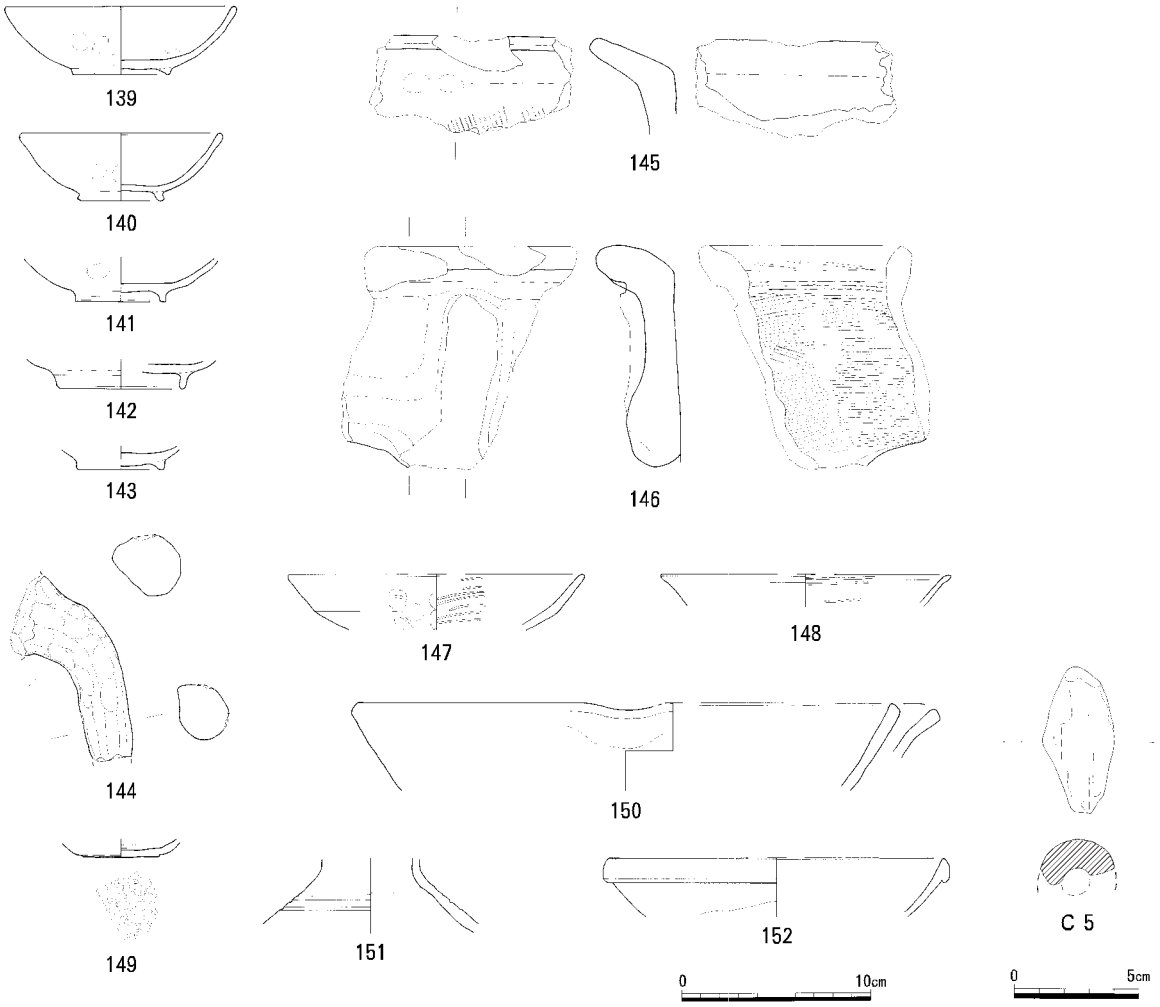
第21図　溝３～８（1/30）

148、備前焼徳利？底部149、東播系須恵器こね鉢150、外面肩部に３条の沈線を施す不明施釉陶器151、白磁椀152のほか、緑釉陶器片、東播系須恵器こね鉢片、常滑焼甕片、土錘Ｃ５、鉄滓などが認められる。土師器142の内面底部には、重ね焼き痕が認められる。不明施釉陶器151は、溝３・４で出土した破片と同一個体である可能性が高い。白磁椀152の高台部は露胎である。

時期は、出土遺物から大きく13世紀代に比定されるが、溝上層（５・６層）には14世紀初頭に下るものが含まれている。（河合）



第22図　溝３～８出土遺物（1/4・1/3）



第23図　溝３～８上層（５・６層）出土遺物（1/4・1/3）

溝９（第６・24図、写真２、図版５）

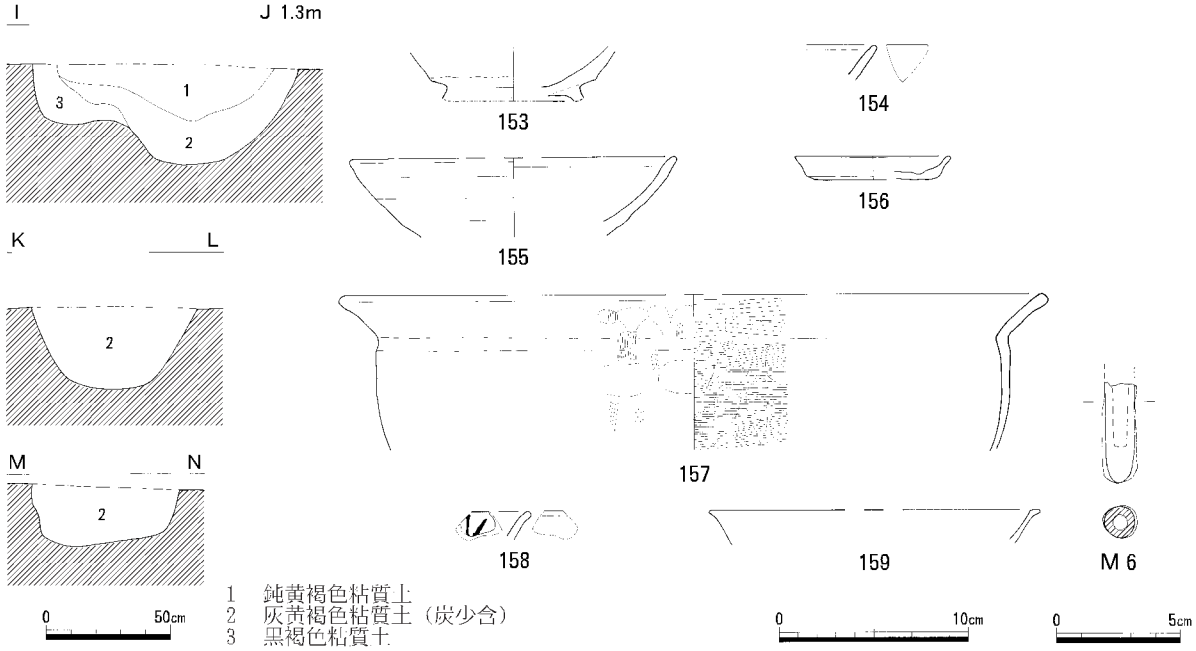
調査区の中央東側で検出した溝で、溝10とは約1.2ｍの間隔を空けて平行する。溝の方向は東西方向で、やや南西に振っている。幅は105㎝で、検出面からの深さは39㎝を測る。検出した東端部で重複関係が判明し、改修を行ったものと考えられる。後述するように、出土遺物にも時期幅がみられ、平行する３本の溝の中では、最後まで機能を保っていたものと推測される。出土遺物には、有段輪高台を有する黒色土器椀**153**、瓦器**154**、土師器椀**155**、皿**156**、鍋**157**、墨書が認められる灰釉陶器椀**158**、白磁椀**159**、須恵器片、井戸２から出土した須恵器長頸瓶**22**と同一個体の破片、石突の可能性のある鉄製品**Ｍ６**のほか、ウシまたはウマの可能性のある獣骨の四肢骨が認められる。

時期は、出土遺物から10世紀末～12世紀と考えておきたい。　（河合）

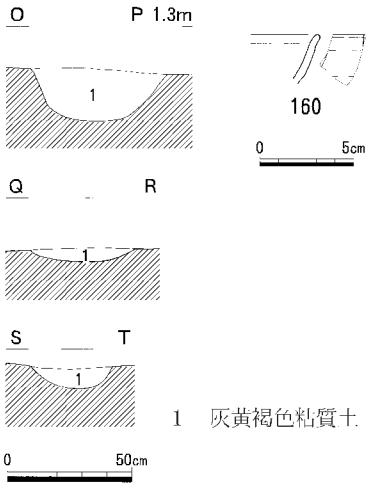
溝10（第６・25図、写真２、図版５）

調査区の中央東側で検出した溝で、溝９・11とは約1.2～1.4ｍの間隔を空けて平行する。幅は54㎝で、検出面からの深さは20㎝を測る。溝底部の標高は、溝９・11同様、東に行くほど低くなっていることから、水は東に向かって流れていたことが明らかである。出土遺物は少なく、わずかに須恵器椀**160**、黒色土器片、土師器片などが認められた程度である。

時期は、出土遺物から10世紀末～11世紀前半に比定される。　（河合）



第24図　溝９（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）



第25図　溝10（1/30）・出土遺物（1/4）

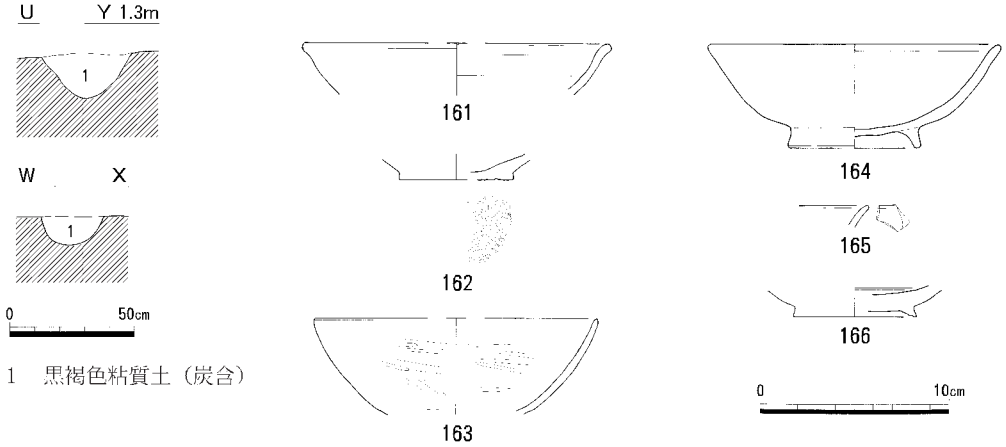
写真２　溝９～11調査風景（西から）

溝11（第６・26図、写真２、図版５）

調査区の中央東側で検出した溝で、溝10とは約1.4ｍの間隔を空けて平行する。幅は34㎝で、検出面からの深さは18㎝を測る。溝９～11の中では、最も南に位置し、かつ一番浅い溝である。平行する溝のうち、最も深い溝９が新しい遺物を含んでいることから考えると、溝の深浅は時期差を示している可能性があるが、出土遺物からは顕著な差を見いだすことができない。

出土遺物には、須恵器椀**161**・**162**、土師器椀**163**、黒色土器椀**164**、緑釉陶器椀**165**・**166**のほか、土師器鍋片がある。須恵器椀**162**は外面底部に糸切り痕が認められ、焼成は不良である。緑釉陶器のうち、色調や形態などから椀**165**は京都産、**166**は近江産と考えられる。後者は有段輪高台を有し、井戸６の上層から出土した緑釉陶器と同一個体である。

時期は、出土遺物から10世紀末～11世紀前半に比定される。　（河合）



第26図　溝11（1/30）・出土遺物（1/4）

4　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物（第27図）

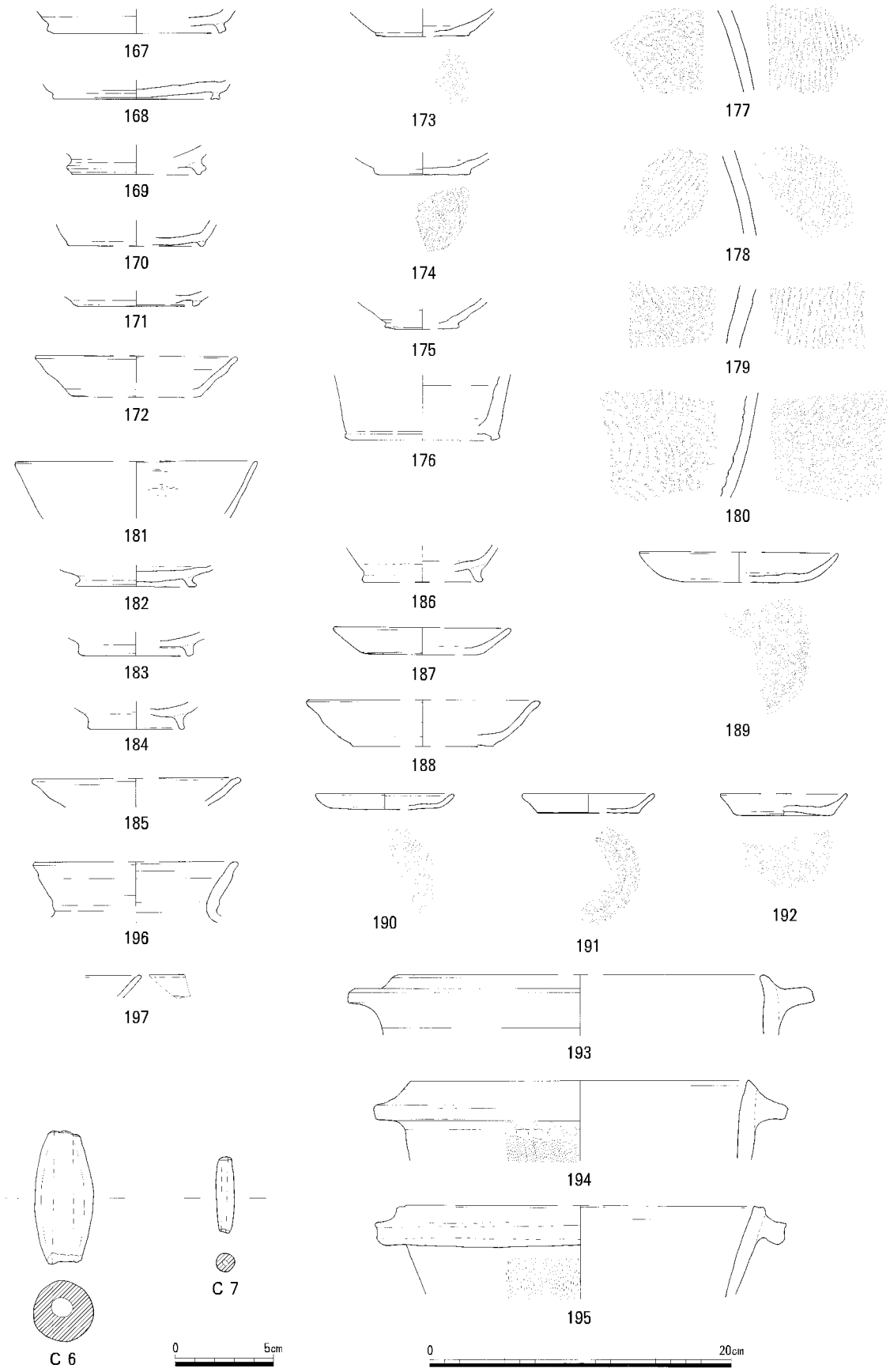
遺構に伴わない遺物としたものには、包含層や基盤層出土土器のほか、遺構出土のものであっても、明らかに時期の異なると判断する遺物も含んでいる。

第27図に図示した遺物は、須恵器14点、黒色土器４点、土師器11点、備前焼１点、緑釉陶器１点、土製品２点である。

須恵器では、杯167～172、椀173～175、壺176、甕177～180がある。椀173・174は底部糸切りを施している。174は内面底部に重ね焼き痕も認められる。黒色土器では、椀181～184がある。土師器では、杯185～189、皿190～192、釜193～195がある。このうち、杯185は丹塗り土師器であり、内外面に丹塗りを施している。また、杯189は底部ヘラ切り後ナデを、皿190は底部糸切りを、皿191・192は底部ヘラ切りをそれぞれ施している。釜193は外面に煤が付着している。備前焼には、壺196がある。色調は灰色であり、胎土・焼成共に精良である。緑釉陶器には、椀197があり、色調や胎土などから京都産と考えられる。土製品には、土錘Ｃ６・Ｃ７がある。共にほぼ完形である。Ｃ６が長さ6.7㎝、幅３㎝、孔径１㎝、重さ55.53ｇ、Ｃ７が長さ3.9㎝、幅0.9㎝、孔径0.3㎝、重さ3.53ｇであり、法量に大きな差が認められる。

ちなみに、以上で示した遺物の中で遺構から出土したものは、167が井戸２の下層、168が溝５、169・173が溝３～８上層（第５・６層）、171が溝３・４、180が井戸１の上層、185が井戸２の下層からそれぞれ出土したものである。

遺物の時期幅は上限を167・168の８世紀代に求めることができるが、これは次章で述べるとおり、遺構の基盤層（微高地）が形成された時期を知る手がかりとなる。鹿田遺跡（県立岡山病院）では、８～９世紀に安定した基盤層が形成された後、９世紀代に集落形成の端緒がみられ、10世紀以降多くの遺構・遺物がみられるようになるのであるが、14世紀以降、遺構・遺物共に急減する。遺構に伴わない遺物の時期幅もおおむねこの時期幅の中で理解できる。（河合）



第27図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/3）

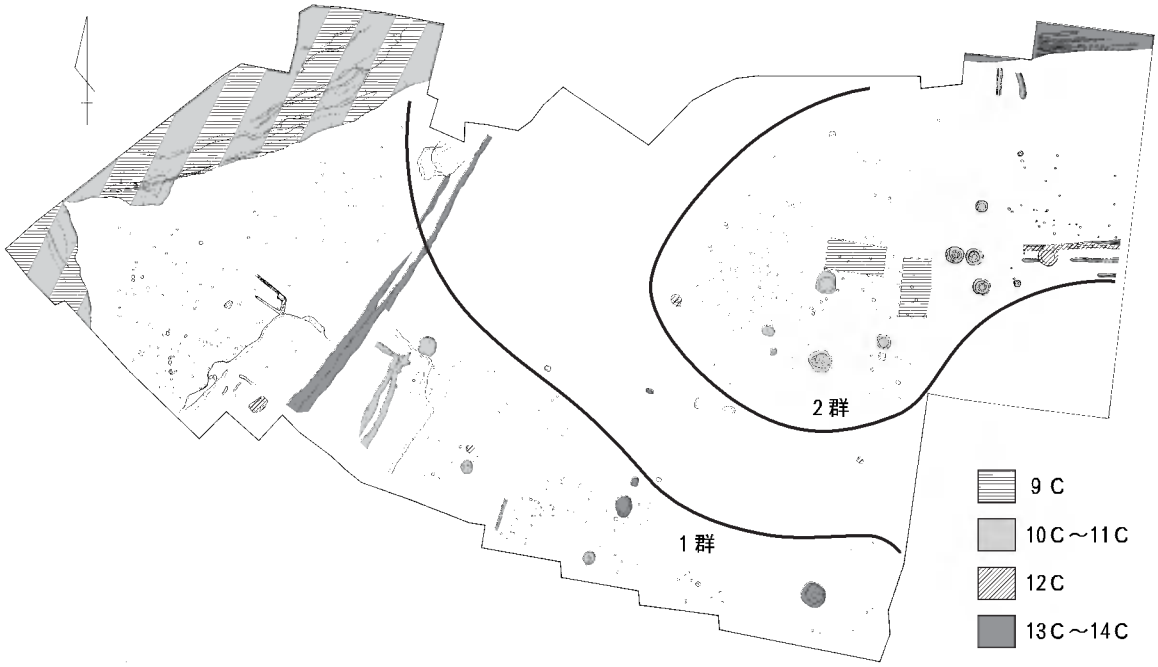
第４章　総　括

第１節　鹿田遺跡（県立岡山病院）の変遷

この遺跡の遺構は、ほぼ同一の基盤層である灰黄褐色系の砂質土（本報告では第６図右第７層が相当）上から検出されており、その標高は約1.3～1.4ｍである。基盤層内から出土した須恵器から、この基盤層（微高地）の形成時期を８～９世紀と考えることができる。それ以前の遺物は、下層から確認されないため、第８～10層の形成時期は不明であるが、標高約0.45ｍの第11層以下で確認された水性堆積を示すシルトと細砂の交互層は周辺の鹿田遺跡（岡山大学医学部（以下、岡大医と略称））第６次調査[1)]や市水道局の南で岡山市教育委員会が試掘調査を行った地点[2)]からもほぼ同一の標高で確認されていることから、同時期のものと推察され、安定した微高地が形成される前の様相を示しているものと判断される。その時期は、鹿田遺跡（岡大医）の調査成果から弥生時代後期以前と考えられる。

当遺跡で確認された遺構の中で最も古く位置づけられるのは、第Ⅰ・Ⅱ期整備事業（以下、Ⅰ・Ⅱ期と略称）３区の掘立柱建物２で９世紀に比定されている。また、その周辺から同時期の土師器や須恵器、緑釉陶器などが確認されていることからも、調査地周辺が９世紀には居住域として利用されていたと考えるが、同時期の遺構・遺物が確認されている鹿田遺跡（岡大医）に比べ、遺構密度が低いことから、集落の縁辺部に位置すると考えられる。

続く10～11世紀には、遺構が増加し、柱穴・井戸・土壙・溝などが検出された。掘立柱建物については、まとめることができなかったが、柱穴はⅠ・Ⅱ期１区から２区南半を経て、３区南西に及ぶ範



第28図　鹿田遺跡（県立岡山病院）遺構全体図（1/1,000）

表２　鹿田遺跡（県立岡山病院）遺構消長表

時　期	建　物	井　戸	土　壙	溝	備　考
９世紀	２？		1		
10～11世紀		13	2	9	柱穴群
12世紀		3	3	1	
13～14世紀		2	3	9	

（時期不明の遺構は含まない）

囲（１群）と、Ⅰ・Ⅱ期３区の北東からⅢ期（本年度）調査区に及ぶ範囲（２群）に集中しており、井戸もそれぞれの群に付随して存在している。両群の間は病院の基礎等で撹乱を受けているが、基礎より深い遺構である井戸もその間から検出されなかったことを考慮すれば、空間地を認めることができ、複数の居住単位が想定される。Ⅰ・Ⅱ期１区の河道出土遺物も多くがこの時期に属する。

12世紀になると、遺構数が著しく減少し、井戸２基・土壙３基・溝１条程度となる。この時期にⅠ・Ⅱ期１区の河道はほぼ埋没する。13世紀以降は、遺構密度では12世紀と変わることはないものの、溝に密度の高い重複関係が認められる点では大きな違いがある。溝の役割については、溝の方向が現地表に残る地割りの方向と一致し、かつ土地境に位置することから、地割りに関わるものであることをうかがわせ、現在の土地区画の起源が鎌倉時代に遡る可能性も示している。また、同様のものは、鹿田遺跡（岡大医）においても検出されており[3]、同時期の現象であることが注目される。　　（河合）

第２節　鹿田遺跡（県立岡山病院）の調査成果の位置づけ

鹿田遺跡（県立岡山病院）の調査成果は多岐にわたっている。そのため、注目される成果をまず個別に概観した後に、周辺の発掘調査成果や文献からの情報を加え、その位置づけを考えてみたい。

食器　本遺跡では10～14世紀にいたる土器・陶磁器類（＝食器）が多く出土しており、古代から中世への食器の変化を考える上で重要である。ここでは、時期の判別できる遺構を中心として、図化できた個体を計量してその時期的変遷とその意義を考えたい。計量の成果を集計をしたものが表３である。便宜的に10～11世紀と12～14世紀に分けて説明したい。

まず、各時期をとおして、椀・皿・杯などの食膳具における土師器の多さが目立つ。これは、全国的に見ると瀬戸内中・東部北岸の一般的な様相とされるものと同様である[4]。緑釉陶器や灰釉陶器などの貴重品が含まれている点では、遺跡の格の高さが推察される。

食膳具について、10～11世紀では、黒色土器が目立つ存在であるが、11世紀半ばでほぼ姿を消し、瓦器・土師器に入れ替わると考えられる。中でも、土師器は形態上の類似性に加え、組成比率の増加からもその可能性が高く、灰白色系の色調（白色化）を呈する「吉備系土師器碗」の出現との関わりの面からも注目される。「吉備系土師器碗」は、これまでの研究で11世紀半ばを前後して出現することが明らかにされているが[5]、それをさかのぼる11世紀前半の資料にも白色化した土師器椀が定量含まれることが明らかになりつつある[6]。当遺跡の資料でも、Ⅰ・Ⅱ期１区の河道上層やⅢ期井戸２に白色化した土師器碗が定量認められ、「吉備系土師器碗」の成立を考える上で重要である。当遺跡の資料は、口縁部に強いヨコナデを施し、端部が肥厚し外反する傾向が認められる点において、時期的に後続する鹿田遺跡（岡大医）１次井戸15などとの共通点が認められることが注目されるであろう。

表3　鹿田遺跡（県立岡山病院）出土食器の用途種類別組成表

10～11世紀

用　途	種　類	個体数
食膳具	土師器	83（60.1%）
	黒色土器	27（19.6%）
	瓦　器	3（2.2%）
	須恵器	16（11.6%）
	緑釉陶器	6（4.3%）
	灰釉陶器	1（0.7%）
	白　磁	2（1.4%）
	小　計	138〔82.6%〕
貯蔵具	須恵器	7（100%）
	小　計	7〔4.2%〕
調理具	播　磨	2（100%）
	小　計	2〔1.2%〕
煮炊具	土師器	17（100%）
	小　計	17〔10.2%〕
総　計		167個体

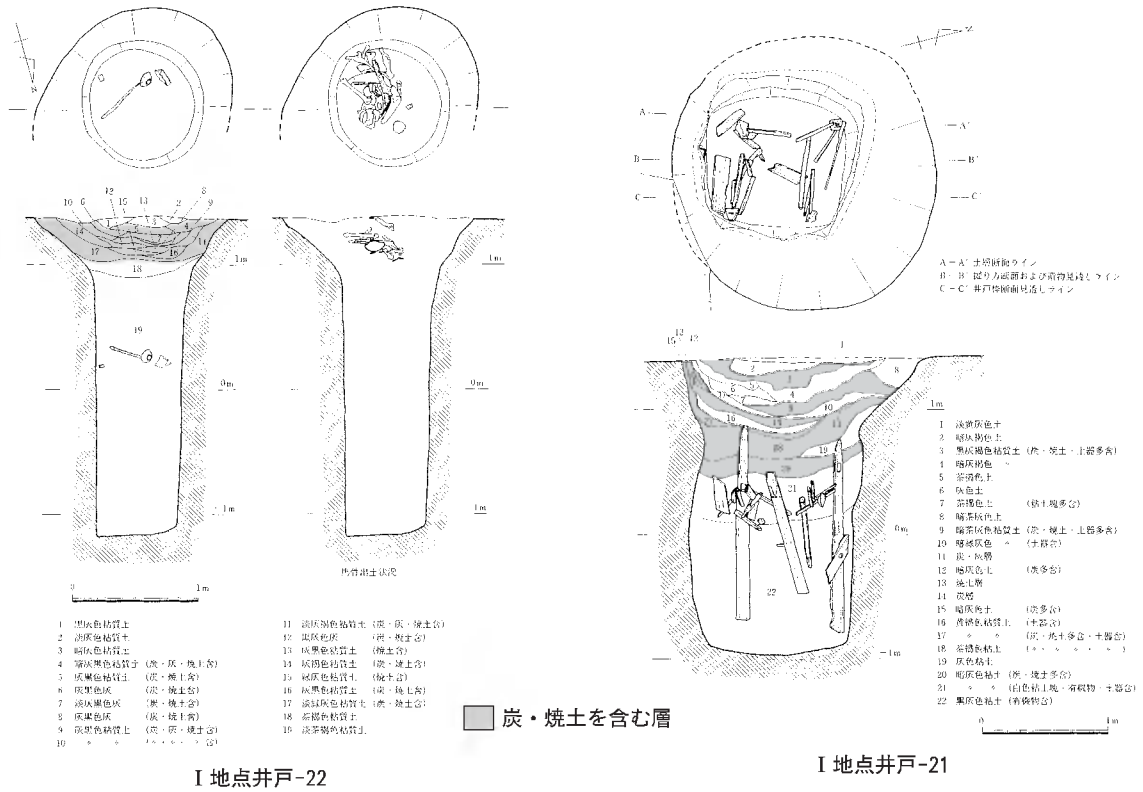
12～14世紀

用　途	種　類	個体数
食膳具	土師器	57（77.0%）
	瓦　器	5（6.8%）
	備　前	4（5.4%）
	白　磁	6（8.1%）
	青　磁	1（1.4%）
	小　計	73〔68.2%〕
貯蔵具	備　前	8（47.1%）
	亀　山	7（42.1%）
	播　磨	2（11.8%）
	小　計	17〔15.9%〕
調理具	備　前	1（25.0%）
	播　磨	3（75.0%）
	小　計	4〔3.7%〕
煮炊具	土師器	13（100%）
	小　計	13〔12.1%〕
総　計		107個体

（個体数は、個体識別法で、時期が明瞭な遺構資料から抽出）

12～14世紀には、備前焼が定量確認でき、瓦器碗や白磁碗も増加する。一方、緑釉陶器や黒色土器が消滅する。瓦器碗は、11世紀半ば以降に楠葉型が出現し、12世紀には和泉型へと主流が変化する。

次に壺・甕などの貯蔵具、鉢・すり鉢などの調理具についてみていくと、10～11世紀においては、貯蔵具は須恵器のみである。調理具は11世紀後半に出現する播磨系須恵器のこね鉢である。12～14世紀には貯蔵具・調理具ともに国産陶器（播磨・備前・亀山）で占められるが、これも瀬戸内中・東部北岸の一般的な様相とされ[7]、活発な瀬戸内海運の一端をみることができる。



第29図　鹿田遺跡（岡大医学部）の事例（1/60）（吉留・山本1988から引用・一部改変）

鍋・釜等の煮炊具は、各時期を通して土師器であり、鍋が主体である。一般的な瀬戸内中・東部北岸の組成と比べ、土製煮炊具の比率が多い傾向がみられるのは、鹿田遺跡の特徴である可能性もある。[8)]

以上、食器の変遷をみてきた結果、当遺跡においても、11世紀半ばで様相が大きく変化することがうかがえた。また、瀬戸内中・東部北岸の一般的な様相と共通する部分が多い点も指摘できる。

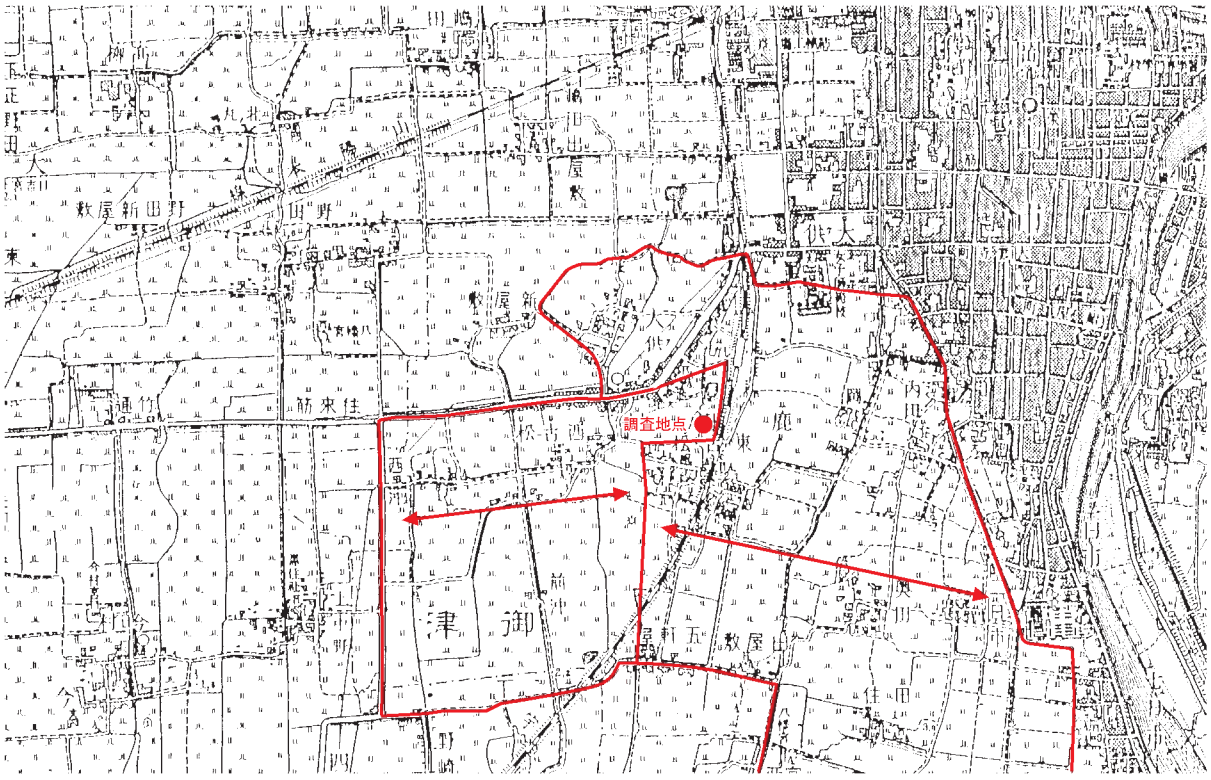
井戸　県立岡山病院の調査全体では18基の井戸が検出された。分布は大きく２箇所に分かれ、複数の居住単位を想定した。同様のあり方は、12・13世紀代の鹿田遺跡（岡大医）でも確認されている。

今回の調査で目を引いたのは、半数の井戸（井戸１・２・５）に炭（焼土塊）が確認されたことである。鹿田遺跡（岡大医）でも、９世紀～14世紀までの同様の確認例がある（第29図：11～12世紀例）。[9)] その中で、焼土等と共に頭骨を含む獣骨が確認された事例が数例（Ⅰ地点井戸22、５次井戸６など）あり、共伴するモモ核とともに、井戸を埋める際の祭祀に使用されたとする見解もある。[10)] 当遺跡においても、モモ核や獣骨が共伴する事例が多いことから、現状では同様の文脈で捉えておきたい。

井戸５下層からは様々な種実が検出された（付載１参照）。平安時代の環境や食文化を物語る重要な資料である。分析者は、付近での畑作の存在や、畑作自体の盛行を示唆しているが、多くの種実が自然に耕作土（埋土）に含まれる考えについては疑問が残る。共伴したモモ核が示すように、少なくとも食用のものに関しては、意図的に埋納（散布）した可能性も考えておきたい。

区画溝　当遺跡においては、密度の高い重複関係が認められる比較的規模が大きい溝群が検出された（Ⅲ期溝３～８）。その時期の主体は13世紀後半である。この溝群は現地表に残る地割りの方向と一致し、かつ土地境に位置することから、区画に関わるものと推察する。Ⅰ・Ⅱ期溝７～９も同様の機能を持ったものと考える。また、時期を同じくして鹿田遺跡（岡大医）でも区画溝が大型化することが指摘されている[11)]ことから、この時期に当遺跡周辺で区画の再整理が行われた可能性が高い。

しかし、同じ区画溝でも当遺跡と鹿田遺跡（岡大医）とでは、区画の軸の傾きが異なることが注意

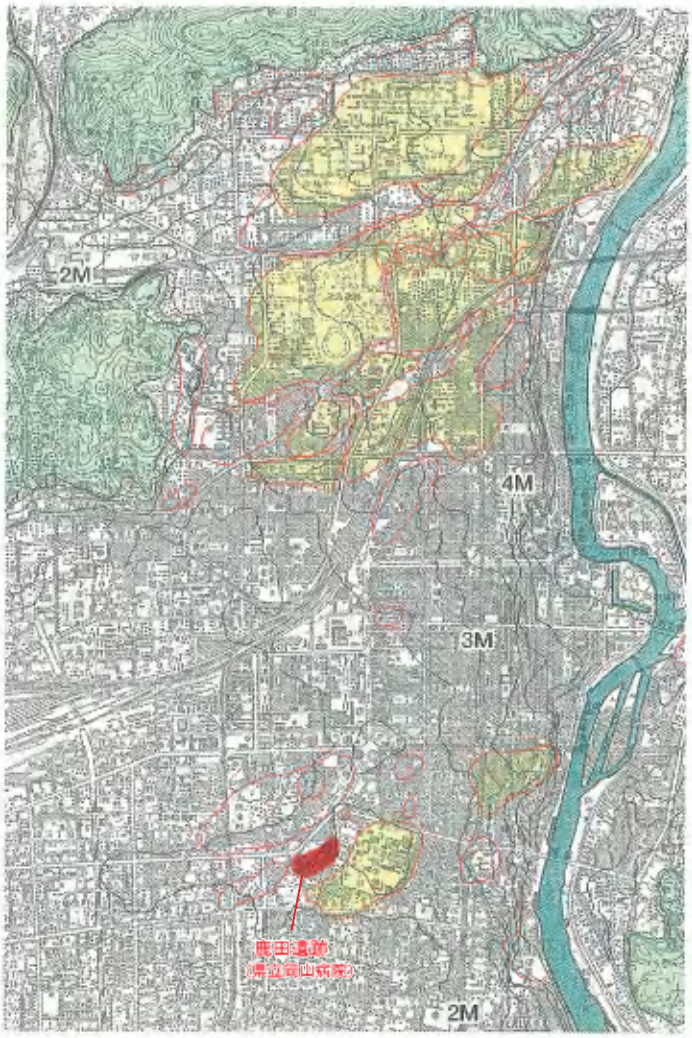


第30図　鹿田遺跡周辺地図と地割りの方向（1/25,000）（大日本帝国陸地測量部発行：大正五年製版）

される。それは現地表に残る地割りの軸線の方向も同様である（第30図）。鹿田遺跡（岡大医）では、８世紀末～９世紀にさかのぼる掘立柱建物群等の遺構の存在が知られていて、その軸線の方位が周辺の地割りの方向に合致するものがあることから、この頃にすでに条里制の地割りが形成されていた可能性が指摘されている。[12] 一方、当遺跡では10世紀末～11世紀前半の東西方向の溝（Ⅲ期溝９～11）が検出されたが、その軸線の方向は13世紀代のⅢ期溝３～８と平行し、当遺跡周辺の地割りとも一致する。この時期には遺構が増加することから、本格的な土地の開発を行う際に区画整理を実施した可能性がある。以上から、地割りの方向は開発時期の違いに関係している可能性が考えられる。

まとめ　以上、食器・井戸・区画溝に注目してきた。当遺跡と鹿田遺跡（岡大医）とでは、資料の質的な面において、多くの共通点があることを確認できた。両遺跡は同一の微高地上にある可能性が高いことからも、有機的な関連性を有すると推察される。この両遺跡を含む範囲は、「備前国上道郡荒野庄領地図」や東大寺文書から推定される鹿田荘の範囲と重なり、遺構・遺物が示す時期的な面でも重なるため、鹿田荘との深い関係が推測できる。

両遺跡の消長をまとめれば、[13] ８世紀末～９世紀に開発が進んだ鹿田遺跡（岡大医）において10世紀後半～11世紀に遺構密度が低くなる際に、当遺跡の遺構密度が高くなり、12世紀に当遺跡において遺構密度が低くなる際に、鹿田遺跡（岡大医）において遺構密度が高くなることがわかる。10世紀後半にみられる集落の消長は、『本朝世紀』などに示されている鹿田荘事件（986（寛和２）年）の頃に当たるため、この事件と集落の消長が関係する可能性が考えられる。12世紀の集落の消長や13世紀の周辺区画の再整理については、定見を持ち得ないが、後述するように、周辺で急速に進行しつつあった荘園の開発が関係している可能性を考えておきたい。

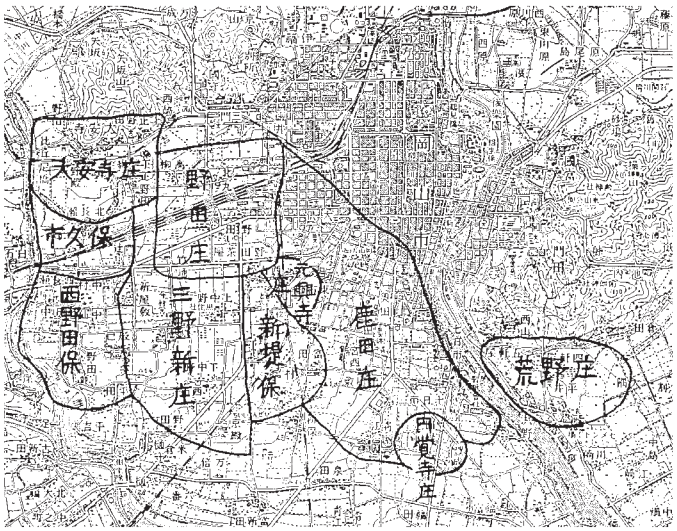


第31図　旭川右岸微地形および遺跡位置図（1/40,000）
（島崎2005から引用・一部改変）

鹿田荘がこの地に開かれたのは、定量出土している緑釉陶器・灰釉陶器等が示すように、当遺跡が瀬戸内海と旭川の結節点に位置し、瀬戸内海航路の重要な交通拠点を押さえるためであったことは想像に難くない。ただし、旭川右岸を選んだのは、早くから地形的に安定していたことも一因であると理解したい。第31図は微地形と遺跡位置図を示したものである。[14] 現状では標高２ｍ以下の地点

には平安時代以前の遺跡が確認されていないため、平安時代の当遺跡周辺が潟（海）であった可能性が高いと考える。周辺に比定される荘園（第32図）は12世紀末以降の文献に初出するものが多く[15]、「備前国上道郡荒野庄領地図」から読み取れるように、この頃に周辺の干拓（荘園開発）が進行したと考えられる。

以上のように、当遺跡の調査成果は、文献から語られることの多かった「鹿田荘」について、具体的に検討するより多くの材料を提供するものであると評価できる。今後は、実態が明らかになりつつある大供本町遺跡など周辺の調査成果をふまえ、研究を積み重ねていく必要がある。（河合）



第32図　旭川流域の荘園分布推定図（藤井1966から引用）

註

1）松木武彦・山本悦世ほか「鹿田遺跡４」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』11 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1997

2）亀山行雄氏が岡山市教育委員会の安川満氏から提供を受けたデータを見せていただいた。

3）松木武彦・山本悦世ほか「鹿田遺跡３」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』６ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993

4）宇野隆夫「中世食文化の諸相 中世食器様式の意味するもの」『国立歴史民族博物館研究報告』71 国立歴史民族博物館 1997

5）武田恭彰「古代土器生産についての一予察（２）」『古代吉備』12 古代吉備研究会 1990・山本悦世「吉備系土師器椀の成立と展開」『鹿田遺跡３（岡山大学構内遺跡発掘調査報告６）』 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993・平井泰男「平安時代の土師器」『加茂政所遺跡ほか（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138）』岡山県古代吉備文化財センター 1999 など

6）百間川米田遺跡３井戸140や百間川原尾島遺跡３井戸９などの資料がある。

7）前掲註４文献

8）鹿田遺跡（岡大医）でも同様の傾向が指摘されており、祭祀的行為との関わりで捉える見解もある。 山本悦世「岡山県南部における土師器鍋の変遷」『鹿田遺跡４（岡山大学構内遺跡発掘調査報告11）』 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1997

9）吉留秀敏・山本悦世ほか「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』３ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988

10）松井章「古代・中世の村落における動物祭祀」『国立歴史民族博物館研究報告』61 国立歴史民族博物館 1985

11）前掲註３文献

12）山本悦世「鹿田遺跡における古代末～中世集落について」『鹿田遺跡Ⅱ（岡山大学構内遺跡発掘調査報告４）』 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1990

13）鹿田遺跡（岡大医）の調査成果については、次の文献を参考としている。 山本悦世「岡山市鹿田遺跡－集落遺跡における日常雑器の流通状況－」『中世瀬戸内の流通－岡山・香川を中心にして－』日本中世土器研究会 2006

14）鳥崎東「津島遺跡をとりまく自然環境と集落の変遷」『津島遺跡６（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告190）』岡山県古代吉備文化財センター 2005

15）藤井駿「第一編 中世における産業経済の発展」『岡山市史（産業経済編）』岡山市 1966・瀬野精一郎編『日本荘園史大辞典』吉川弘文館 2003 などを参考とした。

付載１　鹿田遺跡における種実同定

株式会社古環境研究所

１　はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

２　試料

試料は、全て水洗選別済みのもので溝３・４（鎌倉時代後半)、井戸５の下層（平安時代後半）より出土した種実類である。

３　方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

４　結果

（１）分類群

樹木11、草本26の計37分類群が同定された。学名、和名および粒数を表１に示す。なお、主要な栽培植物であるイネ、オオムギ、コムギ、ウメ、モモについては各部位の計測値を表２に示す。また、イネについては粒幅と粒長の相関図を図１に、粒形・粒大を表３に示した。主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

コナラ属　*Quercus*　堅果（破片）　ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

コウゾ　*Broussonetia*　*kaiznoki*　×　B.　*papyrifera*　種子　クワ科

明黄赤色で広楕円状円形を呈す。光沢はなく、左右の両側面のうち、一側面は稜になり、次第に厚さをます。この面には幅広い浅い凹みがある。果皮にはいぼ状の低い突起が散生し、ざらつく。

ヤマグワ　*Morus*　*australis*　Poir.　種子（破片）　クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

ウメ　*Prunus*　*mume*　Sieb.　et　Zucc.　核（半形）　バラ科

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には小孔が散在する。

モモ　*Prunus*　*persica*　Batsch　核（完形･半形・破片）　場

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

センダン　*Melia*　*azedarach*　L.　var.　*subtripinnata*　Miq.　核（破片）　センダン科

黒褐色で楕円形を呈し、一端は円孔となる。縦に５本の発達した稜が走る。

ブドウ属　*Vitis*　種子（破片）　ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端が尖る。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

サルナシ　*Actinidia*　arguta　Planch.　ex　Miq.　種子　マタタビ科

暗褐色ないしやや紫色を帯びる茶褐色で、楕円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分布する。種皮はやや厚く堅い。

マタタビ　*Actinidia polygama* Planch. ex Maxim.　種子　マタタビ科

暗褐色ないしやや紫色を帯びる茶褐色で、楕円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分布する。種皮はやや厚く堅い。

マタタビ属　*Actinidia*　種子（破片）　マタタビ科

暗褐色ないしやや紫色を帯びる茶褐色で、楕円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分布する。種皮はやや厚く堅い。

ニワトコ　*Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn　種子　スイカズラ科

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある。

〔草本〕

イネ　*Oryza sativa* L.　果実（炭化）　イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。計測値を別表に示す。

エノコログサ属　*Setaria* Beauv.　穎　イネ科

穎は茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。

アワ　*Setaria italica* Beauv.　穎・果実（炭化）　イネ科

茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。

イヌビエ属　*Echinochloa*　穎・果実（炭化）　イネ科

茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な縦方向の模様がある。

オオムギ　*Hordeum vulgare* L.　果実（炭化）　イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。計測値を別表に示す。

コムギ　*Triticum aestivum.* L　果実（炭化）　イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈する。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。比較的四角い形を呈し、短い。計測値を別表に示す。

ホタルイ属　*Scirpus*　果実　カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起がある。

スゲ属　*Carex*　果実　カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科　*Cyperaseae*　果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は三角形である。

黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。

イボクサ　*Aneilema Keisak* Hassk.　種子　ツユクサ科

黒褐色～黒色で楕円形を呈す。腹部に一文字状のへそがあり、側面にくぼんだ発芽孔がある。

カナムグラ　*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.　種子（完形・破片）　クワ科

黒色で円形を呈し、断面形は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するへそがある。

タデ属　*Polygonum*　果実　タデ科

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

黒褐色で先端がとがる広卵形を呈す。表面には網目模様があり、断面は両凸レンズ形である。

アカザ属　*Chenopodium*　種子　アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝がはしる。

ザクロソウ　*Mollugo pentaphylla* L.　種子　ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み、白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。

ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

ササゲ属　*Vigna*　子葉（炭化（完形・半形・破片））　マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。

ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現時点では識別は困難である。

カタバミ属　*Oxalis*　種子　カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6～8本の隆起が走る。

アカネ科　Rubiaceae　種子

偏球形を呈し、背面は広楕円状円形である。中央に円形の穴がある。

エゴマ　*Perilla frutescens* Britton var. *japonica* Hara　果実　シソ科

黒褐色～灰褐色で球形を呈し、下端はわずかに突出する。表面に大きい網目模様がある。径2.2～2.4㎜。径2.2㎜以上をエゴマとし、2.0㎜以下をシソ属とした。

イヌホオズキ　*Solanum nigrum* L.　種子　ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへソがある。表面には網目模様がある。

ナス　*Solanum melongera* L.　種子　ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへソがある。表面には網目模様がある。

ヒョウタン類　*Lagenaria siceraria* Standl.　種子　ウリ科

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。

トウガン　*Benincasa cerifera*　種子（完形・破片）　ウリ科

卵倒形を呈し、扁平。周辺部の縁は平行に一段高くなる。

ウリ類　*Cucumis melo* L.　種子　ウリ科

淡褐色～黄褐色である。楕円形を呈し、一端には「ハ」字状のへこみがある。

藤下（1992）による長さ8.1㎜以上の大粒種子（モモルディカ型）にあたる。

メナモミ　*Siegesbeckia pubescens* Makino　果実　キク科

黒色で倒卵形を呈し、上端は切形で、下端は細く曲る。表面は粗く、断面はひし形である。

タカサブロウ　*Eclipta prostrata* L.　果実　キク科

黄褐色で長倒卵形を呈し、一端は切形である。中央部にはいぼ状の突起がある。

（２）種実群集の特徴

１）溝３・４（鎌倉時代後半）

トウガン11が同定された。

２）井戸５の下層（平安時代後半）

コナラ属５、コウゾ１、ヤマグワ１、ウメ１、モモ31、センダン２、ブドウ属３、サルナシ１、マタタビ１、マタタビ属１、ニワトコ１、イネ23、エノコログサ属31、アワ２、イヌビエ属23、オオムギ56、コムギ２、ホタルイ属２、スゲ属５、カヤツリグサ科69、イボクサ１、カナムグラ1056、タデ属139、アカザ属236、ザクロソウ１、ナデシコ科30、ササゲ属４、カタバミ属２、アカネ科11、エゴマ９、イヌホオズキ54、ナス10、ヒョウタン類１、ウリ類１、メナモミ１、タカサブロウ55が同定された。

５　考察

溝３・４（鎌倉時代後半）からは、トウガン種子のみが同定された。トウガンは弥生時代以降西南日本で検出されるが、あまりまとまっては検出されない。井戸５の下層（平安時代後半）では、樹木ではコナラ属、コウゾ、ヤマグワ、ウメ、モモ、センダン、ブドウ属、サルナシ、マタタビ、マタタビ属、ニワトコ、草本ではイネ、エノコログサ属、アワ、イヌビエ属、オオムギ、コムギ、ホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科、イボクサ、カナムグラ、タデ属、アカザ属、ザクロソウ、ナデシコ科、ササゲ属、カタバミ属、アカネ科、エゴマ、イヌホオズキ、ナス、ヒョウタン類、トウガン、ウリ類、メナモミ、タカサブロウが同定された。

樹木では、ウメ、モモは明らかな栽培植物であり、コウゾ、ヤマグワ、ブドウ属、サルナシ、マタタビ、マタタビ属は種実が食用になる有用植物である。コナラ属、センダン、ニワトコでは、センダンが暖地の海岸沿いに、ニワトコは二次林性である。

草本ではイネ以外に、アワ、オオムギ、コムギ、ササゲ属、エゴマ、ナス、ヒョウタン類、トウガン、ウリ類は畑作物であり、エノコログサ属、イヌビエ属、ホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科、イボクサ、カナムグラ、タデ属、アカザ属、ザクロソウ、ナデシコ科、カタバミ属、アカネ科、イヌホオズキ、メナモミ、タカサブロウは耕地雑草であり、畑作雑草を中心に水田雑草である。

以上のように、鹿田遺跡出土の種実類は栽培植物あるいは有用植物が多いという特徴がみられる。とくに井戸５の下層の種実遺体は人為的影響の強い群集であり、畑作物と畑作雑草を中心に構成され、周囲での畑作、強いてはこの時期の畑作の盛行を強く示唆する。イネ（炭化米）は小さなものが多いが、総じて長粒に偏じる。

参考文献

笠原安夫『日本雑草図説』養賢堂 p.494 1985

南木睦彦「低湿地遺跡の種実」『月刊考古学ジャーナル』355 ニューサイエンス社 p.18-22 1992

吉崎昌一「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナル』355 ニューサイエンス社 p.2-14 1992

金原正明「自然科学と中世遺跡」『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会 p.228-229 2001

表１　鹿田遺跡における種実同定結果

分類群 学名	和名	部　位	溝３・４	井戸５
Arbor	樹木			
Quercus	コナラ属	堅果（破片）		5
Broussonetia kazinoki × *Broussonetia Papyrifera*	コウゾ	種子		1
Morus australis Poir.	ヤマグワ	種子（破片）		1
Prunus mume Sieb. et Zucc.	ウメ	核（半形）		1
Prunus persica Batsch	モモ	核（完形）		7
		（半形）		10
		（破片）		14
Melia azedarach L. var. *Subtripinnata* Miq.	センダン	核（破片）		2
Vitis	ブドウ属	種子（破片）		3
Actinidia arguta Planch. ex Miq.	サルナシ	種子		1
Actinidia polygama Planch. ex Maxim.	マタタビ	種子		1
Actinidia Lindley	マタタビ属	種子（破片）		1
Sambucus racemosa L. subsp. *sieboldiana* Hara	ニワトコ	核		1
Herb	草本			
Oryza sativa L.	イネ	果実（炭化・完形）		23
		（破片）		8
Setaria Beauv.	エノコログサ属	穎		31
Setaria italica Beauv.	アワ	果実（炭化）		2
Echinochloa Beauv.	イヌビエ属	果実（炭化）		23
Hordeum vulgare L.	オオムギ	果実（炭化・完形）		48
		（破片）		8
Triticum aestivum L.	コムギ	果実（炭化）		2
Scirpus	ホタルイ属	果実		2
Carex	スゲ属	果実		5
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実		69
Aneilema keisak Hassk.	イボクサ	種子		1
Humulus scandens Merr.	カナムグラ	種子		401
		（破片）		655
Polygonum	タデ属	果実		139
Chenopodium	アカザ属	種子		236
Mollugo pentaphylla L.	ザクロソウ	種子		1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子		30
Vigna	ササゲ属	子葉（完形）		2
		（半形）		1
		（破片）		1
Oxalis	カタバミ属	種子		2
Rubiaceae	アカネ科	種子		11
Perilla frutescens Britton var. *japonica* Hara	エゴマ	果実		9
Solanum nigrum L.	イヌホウズキ	種子		54
Solanum melongena L.	ナス	種子		10
Lagenaria siceraria Standl.	ヒョウタン類	種子		1
Benincasa cerifera	トウガン	種子（完形）	3	
		（破片）	9	
Cucumis melo L.	ウリ類	種子		1
Siegesbeckia pubescens Makino	メナモミ	果実		1
Eclipta prostrata L.	タカサブロウ	果実		55
Total	合計		12	1880
Unknown	不明種実片			2
	備　考			芽(+)、石(+) 材(+)、刺(+)

表２　イネ・オオムギ・コムギ炭化果実、ウメ・モモ核計測値

・イネ

試 料	長さ(mm)	幅(mm)
1	4.1	2.3
2	3.8	2.1
3	3.2	1.7
4	5.1	2.8
5	4.6	2.2
6	4.4	2.6
7	3.3	1.6
8	5.7	3.1
9	5.4	2.8
10	5.0	2.3
11	4.0	2.5
12	4.4	2.5
13	4.2	2.6
14	5.4	2.7
15	4.3	2.2
16	5.3	2.6
17	4.1	2.4
18	4.3	1.7
19	4.1	1.8
20	3.6	1.6
21	5.0	2.7
22	3.5	1.8
23	5.6	2.5
平均	4.5	2.3
最大	5.7	3.1
最小	3.2	1.6

・コムギ

試 料	長さ(mm)	幅(mm)
1	3.5	2.8
2	3.6	2.5
平 均	3.6	2.7

・オオムギ

試 料	長さ(mm)	幅(mm)
1	4.4	2.7
2	4.0	2.1
3	4.6	2.0
4	4.8	2.5
5	4.4	1.8
6	5.0	3.1
7	5.0	2.6
8	4.6	2.0
9	5.4	2.3
10	5.1	2.6
11	5.0	3.0
12	4.5	2.4
13	4.8	2.6
14	5.3	2.4
15	4.1	2.0
16	4.0	2.1
17	4.0	2.4
18	4.5	2.6
19	4.3	1.4
20	4.0	2.1
21	5.0	3.1
22	4.6	2.0
23	5.0	2.6
24	5.5	2.8
25	4.0	1.5
26	4.6	2.0
27	4.8	2.3
28	5.6	2.8
29	5.6	2.0
30	4.7	2.8
31	4.7	2.8
32	4.9	2.5
33	5.5	2.4
34	5.3	2.4
35	4.3	2.9
36	4.5	3.1
37	4.6	3.6
38	6.1	2.8
39	6.7	3.1
40	7.1	3.1
41	6.2	3.6
42	5.5	2.2
43	4.8	3.5
44	4.5	3.1
45	4.8	2.5
46	4.3	3.0
47	5.4	2.0
48	5.3	2.5
平 均	4.9	2.5
最 大	7.1	3.6
最 小	4.3	1.4

・ウメ

試 料	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
井戸５	15.51	11.88	8.16

・モモ

試 料	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
井戸５	24.65	17.72	13.85
	23.91	18.85	14.47
	25.57	19.09	14.49
	25.35	17.95	13.70
	24.08	17.74	12.34
	29.23	18.48	14.61
	22.52	16.98	12.50
	23.73	20.25	—
	25.10	17.17	—
	22.17	15.25	—
	23.13	15.82	—
	26.42	20.71	—
	22.84	15.80	—
	22.77	14.32	—
	22.34	15.65	—
	22.66	14.84	—
	24.59	16.92	—

表３　イネの粒形とその大きさ

粒形 ＼ 粒大		極々小	極小	小	中	合計 粒数	合計 %
長粒（*L*）	2.6－3.0 *Ll*					8	35
	2.3－2.6 *Lm*	1		1			
	2.0－2.3 *Ls*	3	2	1			
短粒（*S*）	1.8－2.0 *Sl*	2	1	4	1	15	65
	1.6－1.8 *Sm*	1	5				
	1.4－1.6 *Ss*		1				
円粒（*R*）	1.2－1.4 *Rl*					0	0
	1.0－1.2 *Rm*						
合計	粒数	7	9	6	1	23	
	%	30	40	26	4		100

（粒長/粒幅で粒形を表し、粒長×粒幅で粒の大きさを表す）

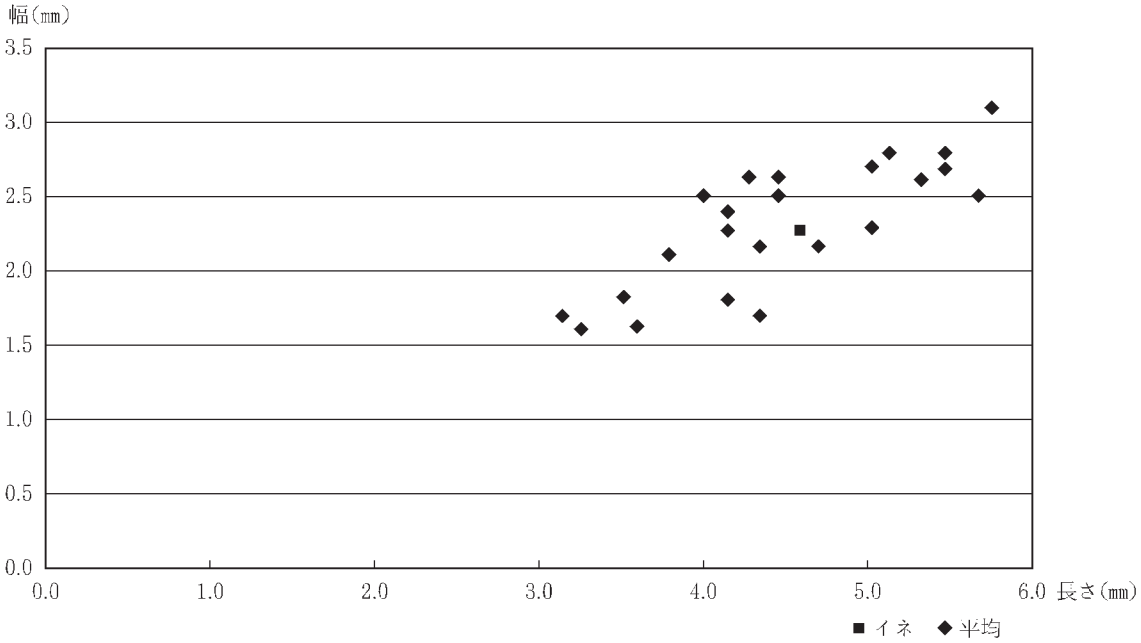
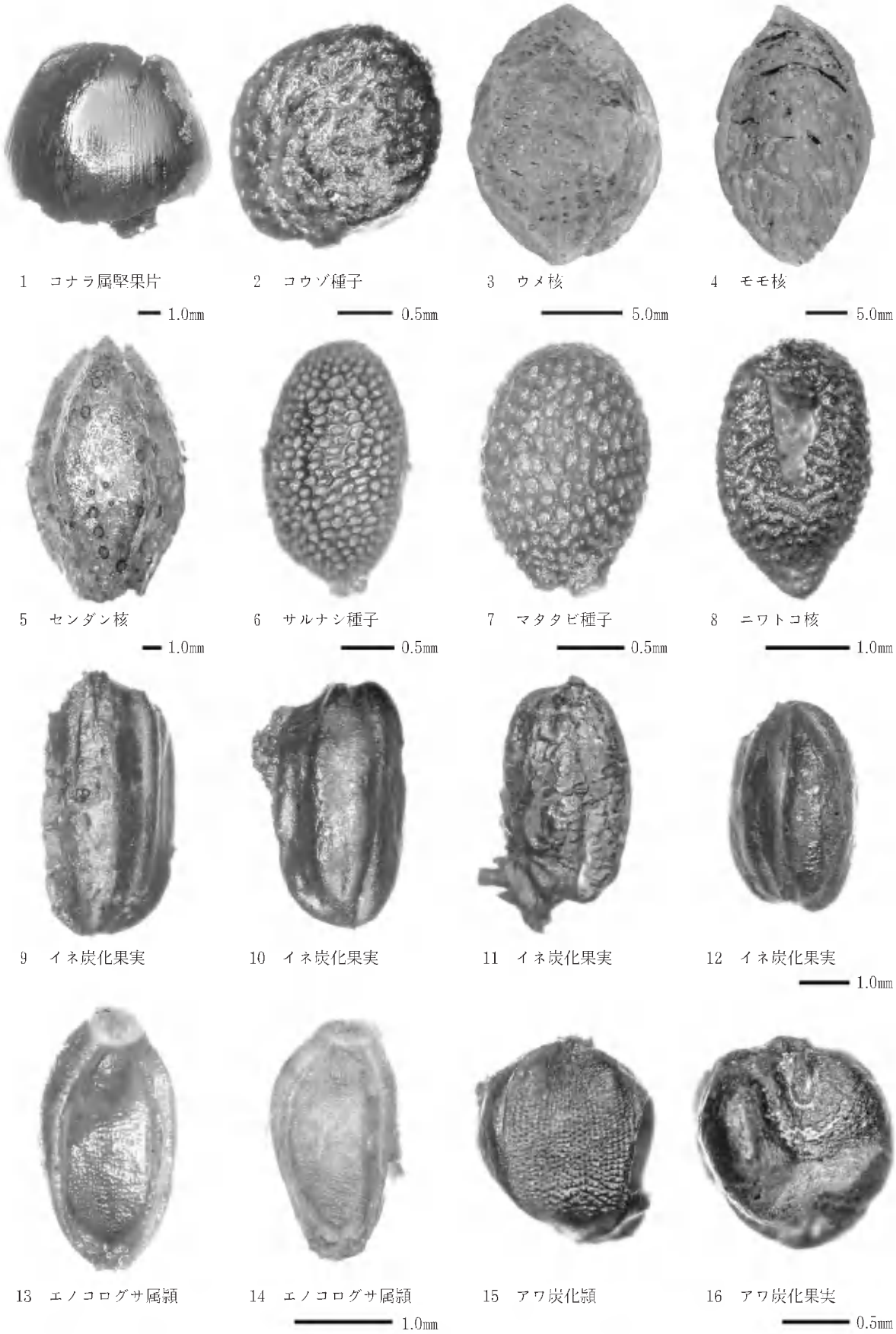


図１　イネ計測値

鹿田遺跡の種実　Ⅰ


1　コナラ属堅果片
1.0㎜
2　コウゾ種子
0.5㎜
3　ウメ核
5.0㎜
4　モモ核
5.0㎜
5　センダン核
1.0㎜
6　サルナシ種子
0.5㎜
7　マタタビ種子
0.5㎜
8　ニワトコ核
1.0㎜
9　イネ炭化果実
10　イネ炭化果実
11　イネ炭化果実
12　イネ炭化果実
1.0㎜
13　エノコログサ属頴
14　エノコログサ属頴
1.0㎜
15　アワ炭化頴
16　アワ炭化果実
0.5㎜

鹿田遺跡の種実 Ⅱ

17　ヒエ炭化穎

18　ヒエ炭化穎

19　ヒエ炭化穎

20　ヒエ炭化穎

1.0㎜

21　オオムギ炭化果実

22　同左

23　オオムギ炭化果実

24　同左

1.0㎜

25　コムギ炭化果実

26　同左

1.0㎜

27　ホタルイ属果実

0.5㎜

28　スゲ属果実

1.0㎜

29　カヤツリグサ科果実

1.0㎜

30　イボクサ種子

1.0㎜

31　カナムグラ種子

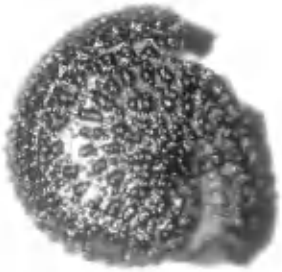
1.0㎜

32　タデ属果実

1.0㎜

鹿田遺跡の種実 Ⅲ

33　アカザ属種子　0.1㎜



34　ザクロソウ種子　0.1㎜

35　ナデシコ科種子　0.5㎜

36　カタバミ属種子　0.5㎜

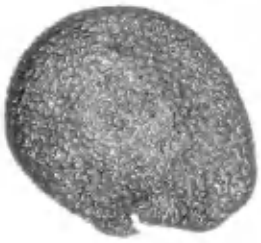
37　ササゲ属子葉

38　同左　1.0㎜

39　アカネ科種子　0.5㎜

40　エゴマ果実　1.0㎜

41　ナス種子



42　ナス種子　1.0㎜

43　イヌホウズキ種子　0.5㎜

44　ヒョウタン類種子　1.0㎜

45　トウガン種子　1.0㎜

46　ウリ種子　1.0㎜

47　メナモミ果実　0.5㎜

48　タカサブロウ果実　1.0㎜

付載２　鹿田遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

１　試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
№１	井戸２上層	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄	AMS
№２	井戸２上層	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄	AMS

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

２　測定結果

試料名	測定№（Beta－）	^{14}C年代[1)]（年BP）	δ^{13}C[2)]（‰）	補正^{14}C年代[3)]（年BP）	暦年代（西暦）[4)]
№１	220534	970±40	－24.9	970±40	交点：cal AD 1030 １σ：cal AD 1020～1050 cal AD 1100～1140 ２σ：cal AD 1000～1170
№２	220535	1220±40	－26.3	1200±40	交点：cal AD 810, AD 840, AD 860 １σ：cal AD 780～890 ２σ：cal AD 710～910 cal AD 920～960

１）14C年代測定値

試料の14C/12C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。14Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

２）δ（デルタ）13C測定値

試料の測定14C/12C比を補正するための炭素安定同位体比（13C/12C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正14C年代値

δ13C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、14C/12Cの測定値に補正値を加えて算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の14Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と14C年代の比較により作成された較正曲線を用いる。今回暦年代較正に使用したプログラムは、CALIB5.0.2である。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正14C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（シグマ）（68％確率）と２σ（95％確率）は、補正14C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。暦年代範囲の後のカッコ内の百分率の値は、その暦年代範囲の確からしさ（確率分布）を示し、10％未満については省略した。

遺構一覧表・遺物観察表

表４　井戸一覧表

遺構名称		平面形態	規模（cm）			底面標高（cm）	井側水溜	時期	出土遺物
掲載名	調査名		長さ	幅	深さ				
井戸１	№16井戸	円形	148	139	96	29		10Ｃ末～11Ｃ	須恵器・黒色土器・土師器・緑釉陶器・土錘・刀子・釘
井戸２	№14井戸	円形	222	198	123	14		10Ｃ末～11Ｃ	須恵器・黒色土器・土師器・瓦質土器・緑釉陶器・鈎鏃・釘
井戸３	№20井戸	円形	200	195	148	－36	曲物１	10Ｃ末～11Ｃ	須恵器・黒色土器・土師器
井戸４	№21井戸	円形	202	179	127	－14		10Ｃ末～11Ｃ	黒色土器・土師器・瓦質土器
井戸５	№11井戸	円形	80	76	166	－42	曲物２？	10Ｃ末～11Ｃ	須恵器・黒色土器・土師器・木器
井戸６	№10井戸	円形	279	254	136	－21	曲物１？	12Ｃ末	須恵器・土師器・瓦質土器・備前・亀山・東播・白磁・木器・釘

表５　土壙一覧表

遺構名称		平面形態	規模（cm）			底面標高（cm）	長軸	時期	出土遺物
掲載名	調査名		長さ	幅	深さ				
土壙１	№18土壙	円形	66	60	26	98		10Ｃ末～11Ｃ	須恵器・黒色土器

表６　溝一覧表

遺構名称		規模（m）			流走方向	性格	時期	出土遺物
掲載名	調査名	検出長	幅	深さ				
溝１	№19溝	4.8	0.46	0.11	北－南		10Ｃ末～11Ｃ	
溝２	№15溝	4.6	0.56	0.19	北北西－南南東		10Ｃ末～11Ｃ	黒色土器・土師器
溝３	№６溝	13.1	1.04	0.56	東北東→西南西	区画溝	13Ｃ	土師器・瓦質土器・白磁・砥石・土錘
溝４		5.3	0.42	0.24	東北東→西南西	区画溝	13Ｃ	
溝５	№８溝	13.0	0.65	0.52	東北東→西南西	区画溝	13Ｃ	土師器・土錘
溝６	№13溝	4.7	0.19	0.31	東北東→西南西	区画溝	13Ｃ	土師器
溝７	№７溝	6.1	1.04	0.59	東北東→西南西	区画溝	13Ｃ	土師器・東播・白磁・土錘
溝８	№12溝	3.4	0.36	0.86	東北東→西南西	区画溝	13Ｃ	
溝９	№５溝	17.3	1.05	0.39	西南西→東北東	区画溝？	10Ｃ末～12Ｃ	黒色土器・土師器・灰釉陶器・瓦質土器・白磁・石突
溝10	№４溝	16.8	0.54	0.20	西南西→東北東	区画溝？	10Ｃ末～11Ｃ	須恵器
溝11	№１溝	3.4	0.34	0.18	西南西→東北東	区画溝？	10Ｃ末～11Ｃ	須恵器・黒色土器・土師器・緑釉陶器

表７　土製品観察表

掲載番号	出土遺構	器種	法量（cm）			重量（g）	色調	時期	胎土	特徴
			長さ	幅	孔径					
Ｃ１	井戸１	土錘	2.1	1.1	0.3	2.12	にぶい黄橙色	10Ｃ末～11Ｃ	１mm以下の砂粒	１/２残存
Ｃ２	溝３・４	土錘	1.5	0.8	0.3	0.55	にぶい黄褐色	13Ｃ	１mm以下の砂粒	破片
Ｃ３	溝５	土錘	4	2.1	1	10.04	暗灰黄色	13Ｃ	１mm以下の砂粒	破片
Ｃ４	溝７	土錘	1.9	2.3	0.4	6.92	暗灰黄色	13Ｃ	１mm以下の砂粒	破片
Ｃ５	溝３～８上層	土錘	5.9	2.9	1	20.04	にぶい黄橙色	13Ｃ	１mm以下の砂粒	破片
Ｃ６	包含層	土錘	6.7	3	1	55.53	にぶい黄橙色		２mm以下の砂粒	完形
Ｃ７	包含層	土錘	3.9	0.9	0.3	3.53	にぶい褐色		１mm以下の砂粒	完形

表８　石製品観察表

掲載番号	出土遺構	器種	法量（cm）			重量（g）	色調	時期	材質	特徴
			長さ	幅	孔径					
Ｓ１	溝３・４	砥石	5.5	4.7	1.9	57.03	にぶい黄橙色	13Ｃ	流紋岩	破片

表９　金属製品観察表

掲載番号	出土遺構	器種	材質	法量（cm）			重量（g）	時期	備考
				長さ	幅	孔径			
Ｍ１	井戸１	刀子	鉄	3.4	0.8	0.2	1.86	10C末～11C	破片
Ｍ２	井戸１	釘	鉄	2.6	0.9	0.5	3.70	10C末～11C	破片
Ｍ３	井戸２	鏃	鉄	12.2	1.8	0.9	9.58	10C末～11C	基部一部欠損
Ｍ４	井戸２	釘	鉄	2.1	0.5	0.4	1.79	10C末～11C	破片
Ｍ５	井戸６	釘	鉄	1.3	1.9	0.9	3.01	12C末	破片
Ｍ６	溝９	石突？	鉄	4.0	1.3	1.3	13.30	10C末～12C	上部一部欠損

表10　木製品観察表

掲載番号	出土遺構	種類	木取	法量（cm）				時期	備考
				長さ	幅	高さ	厚さ		
Ｗ１	井戸３	曲物	柾目		49	29		10C末～11C	図・法量は現状
Ｗ２	井戸５	曲物	板目		42.5	31		10C末～11C	ほぼ完形
Ｗ３	井戸５	曲物	板目	35.7	3.6		0.5	10C末～11C	破片
Ｗ４	井戸５	人形？		15.7	5.3		4.3	10C末～11C	完形
Ｗ５	井戸６	曲物	柾目	15.7	4.5		0.6	12C末	破片
Ｗ６	井戸６	曲物底	柾目	13.2	7.9		0.5	12C末	１/２強残存

表11　土器観察表

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				色調	胎土	特徴
				口径	胴径	底径	器高			
1	井戸1	須恵器	瓶		7.2		(6.1)	灰白色（10Y7/1）	精良	頸部～胴部1/3
2	井戸1	緑釉陶器	椀				(1.2)	暗オリーブ色（7.5Y4/3）	精良	近江、口縁部破片
3	井戸1	黒色土器	椀	14.0			(3.3)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	1/10
4	井戸1	黒色土器	椀	15.7			(4.9)	灰黄色（2.5Y6/2）	精良	1/4
5	井戸1	黒色土器	椀	16.3			(4.7)	灰白色（2.5Y7/1）	1mm以下の砂粒	1/4
6	井戸1	土師器	椀	12.0			(2.2)	灰黄褐色（10YR5/2）	1mm以下の砂粒	1/12
7	井戸1	土師器	椀	14.2			(3.3)	鈍い黄橙色（10YR7/4）	1mm以下の砂粒	1/8
8	井戸1	土師器	椀			6.4	(1.2)	鈍い黄橙色（10YR7/4）	1mm以下の砂粒	高台部1/8
9	井戸1	土師器	椀			6.8	(1.5)	鈍い黄橙色（10YR7/4）	1mm以下の砂粒	高台部1/6
10	井戸1	土師器	杯			8.6	(2.5)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	底部1/4
11	井戸1	土師器	杯			8.5	(3.1)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	底部ヘラ切り後ナデ、底部完形、煤付着
12	井戸1	土師器	皿	9.7			(1.1)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	口縁部1/7
13	井戸1	土師器	皿	8.7		4.0	1.0	鈍い橙色（7.5YR7/4）	0.5mm以下の砂粒	底部指押さえ、3/4
14	井戸1	土師器	皿	9.7		6.2	1.5	鈍い黄橙色（10YR7/4）	2mm以下の砂粒	底部ヘラ切り、口縁部1/11、底部ほぼ完形
15	井戸1	土師器	皿	9.7		7.7	1.7	灰黄褐色（10YR5/2）	0.5mm以下の砂粒	底部ヘラ切り後指押さえ、ほぼ完形
16	井戸1	土師器	皿	9.6		7.0	(1.5)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	精良	底部ヘラ切り？、1/7
17	井戸1	土師器	皿	8.7		7.2	1.4	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	底部ヘラ切り、口縁部1/6、底部1/2
18	井戸1	土師器	皿	9.7		7.1	1.8	灰黄褐色（10YR5/2）	1mm以下の砂粒	底部ヘラおこし、ほぼ完形
19	井戸1	土師器	鍋	29.8			(5.9)	鈍い黄橙色（10YR7/4）	1mm以下の砂粒	口縁部破片、煤付着
20	井戸1	土師器	鍋	33.2			(6.0)	鈍い黄褐色（10YR7/2）	2mm以下の砂粒	口縁部1/10
21	井戸1	土師器	鍋	35.2			(5.7)	鈍い黄褐色（10YR5/3）	2mm以下の砂粒	口縁部破片、煤付着
22	井戸2	須恵器	長頸瓶	20.0			(17.5)	褐灰色（5YR5/1）	2.5mm以下の砂粒	口縁部1/6、胴部1/2、溝5に同一個体
23	井戸2	須恵器	椀				(3.1)	褐灰色（10YR6/1）	1mm以下の砂粒	口縁部破片
24	井戸2	緑釉陶器	皿				(1.1)	オリーブ灰色（10Y5/2）	精良	京都、口縁部破片
25	井戸2	黒色土器	椀	10.2			(3.0)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	1/8
26	井戸2	黒色土器	椀	14.6			(3.3)	鈍い黄橙色（10YR7/4）	1mm以下の砂粒	1/4
27	井戸2	黒色土器	椀	15.4			(4.4)	鈍い橙色（7.5YR6/4）	1mm以下の砂粒	1/8
28	井戸2	黒色土器	椀	15.9			(3.0)	鈍い橙色（7.5YR6/4）	精良	口縁部1/16
29	井戸2	黒色土器	椀	15.6			(2.1)	灰黄褐色（10YR6/2）	精良	口縁部1/16
30	井戸2	瓦器	椀	15.4			(3.7)	暗灰色（N3/）	精良	1/14、内外面黒色
31	井戸2	黒色土器	椀			4.2	(1.1)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	高台部完形
32	井戸2	黒色土器	椀			6.4	(2.5)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	高台部1/4
33	井戸2	土師器	椀	11.8		5.4	3.8	灰黄褐色（10YR5/2）	1mm以下の砂粒	須恵質、1/2
34	井戸2	土師器	椀	13.6			(3.0)	灰白色（2.5Y8/1）	1mm以下の砂粒	1/9
35	井戸2	土師器	椀	15.8			(1.3)	浅黄橙色（10YR8/3）	精良	1/5
36	井戸2	土師器	椀	15.9			(3.3)	灰白色（10YR7/1）	精良	1/12
37	井戸2	土師器	椀	15.6			(3.4)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	1/16
38	井戸2	土師器	椀	16.3			(3.7)	灰白色（10YR7/1）	1mm以下の砂粒	1/12
39	井戸2	土師器	椀	16.8			(3.4)	灰白色（2.5Y8/2）	1mm以下の砂粒	1/8
40	井戸2	土師器	椀	15.8		6.8	5.4	鈍い黄橙色（10YR7/4）	1mm以下の砂粒	1/4
41	井戸2	土師器	椀			6.6	(3.3)	鈍い橙色（2.5YR6/4）	精良	高台部完形
42	井戸2	土師器	椀	5.8			(1.5)	灰白色（2.5Y8/2）	1mm以下の砂粒	高台部1/3
43	井戸2	土師器	椀			6.8	(2.2)	灰白色（10Y8/2）	1mm以下の砂粒	高台部1/2
44	井戸2	土師器	杯	13.4			3.8	鈍い橙色（7.5YR7/4）	1mm以下の砂粒	胴部1/4
45	井戸2	土師器	杯	15.2		8.8	2.8	褐灰色（10YR5/1）	1mm以下の砂粒	1/12
46	井戸2	土師器	杯	14.8		8.2	3.8	橙色（5YR6/6）	1mm以下の砂粒	1/6、復元完形
47	井戸2	土師器	皿	12.3		10.2	1.9	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	底部ヘラ切り、1/6
48	井戸2	土師器	杯	14.5		8.4	39.5	橙色（5YR6/6）	1mm以下の砂粒	底部ヘラおこし、3/4
49	井戸2	土師器	杯	13.9		8.7	1.6	鈍い黄橙色（10YR6/3）	1mm以下の砂粒	底部ヘラ切り、口縁部1/3、底部2/3
50	井戸2	土師器	皿	8.9		7.0	1.8	鈍い黄褐色（10YR7/2）	1mm以下の砂粒	底部指押さえ、口縁部1/4、底部完形
51	井戸2	土師器	皿	9.7		7.4	1.9	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	1/5
52	井戸2	土師器	皿	10.0		6.9	1.6	鈍い橙色（7.5YR7/4）	0.5mm以下の砂粒	1/4
53	井戸2	土師器	皿	9.6		6.7	1.3	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	底部ヘラ切り、3/8
54	井戸2	土師器	皿	9.4		8.3	1.5	鈍い橙色（10YR6/4）	1mm以下の砂粒	底部ヘラ切り、2/3
55	井戸2	土師器	皿	9.2		7.8	1.4	鈍い黄橙色（10YR7/4）	1mm以下の砂粒	底部ヘラ切り、口縁部1/3、底部1/2
56	井戸2	土師器	鍋	39.7			(29.6)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	2mm以下の砂粒	口縁部1/2、胴部3/4、煤付着
57	井戸2	土師器	鍋	32.2			(9.0)	褐灰色（10YR4/1）	4mm以下の砂粒	口縁部1/4
58	井戸3	須恵器	椀	14.0			(1.7)	灰白色（2.5Y7/1）	1mm以下の砂粒	口縁部破片
59	井戸3	須恵器	杯			9.6	(1.4)	灰色（10Y5/1）	1mm以下の砂粒	底部1/10
60	井戸3	須恵器	杯			10.0	(1.2)	褐灰色（10YR4/1）	1mm以下の砂粒	底部1/10
61	井戸3	黒色土器	椀	15.0			(2.7)	鈍い黄橙色（10YR7/4）	1mm以下の砂粒	口縁部破片
62	井戸3	土師器	杯	14.0			(2.9)	灰黄褐色（10YR4/2）	1mm以下の砂粒	口縁部破片
63	井戸4	黒色土器	椀	15.9			(2.6)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	精良	口縁部1/16
64	井戸4	瓦器	椀	15.0			(1.2)	暗灰色（N3/）	精良	口縁部破片、内外面黒色
65	井戸4	土師器	杯	13.4			(3.2)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	精良	口縁部破片
66	井戸4	土師器	杯			7.6	(1.9)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	底部1/6
67	井戸4	土師器	杯			8.0	(2.2)	鈍い橙色（7.5YR6/4）	1mm以下の砂粒	底部ヘラ切り、底部1/8
68	井戸4	土師器	灯明皿	10.0		7.3	1.8	灰白色（2.5Y7/1）	精良	1/4、煤付着
69	井戸4	土師器	鍋	30.0			(5.8)	灰黄褐色（10YR4/2）	2mm以下の砂粒	口縁部1/8、煤付着

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				色調	胎土	特徴
				口径	胴径	底径	器高			
70	井戸5	須恵器	椀	14.4			(3.0)	灰色（5Y7/1）	精良	口縁部破片、重ね焼き痕
71	井戸5	黒色土器	椀	15.0		5.4	6.1	鈍い橙色（5YR7/4）	精良	1/4
72	井戸5	黒色土器	椀	16.2			(4.4)	鈍い橙色（7.5YR6/4）	精良	1/16
73	井戸5	土師器	皿	8.2			1.9	鈍い黄橙色（10YR7/4）	精良	1/5
74	井戸5	土師器	皿	10.4			2.5	鈍い黄橙色（10YR6/4）	精良	底部指押さえ、1/2
75	井戸6	須恵器	椀	12.0			(3.3)	灰色（5Y6/1）	1mm以下の砂粒	口縁～胴部1/9
76	井戸6	土師器	椀	13.2			(3.4)	灰白色（5Y8/1）	2.5mm以下の砂粒	口縁部1/6、胴部1/4
77	井戸6	土師器	椀	13.2			(3.7)	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	口縁～胴部1/9
78	井戸6	土師器	椀	14.2			(3.5)	灰白色（2.5Y8/1）	2.5mm以下の砂粒	口縁部1/4
79	井戸6	土師器	椀	14.4			(3.7)	灰白色（2.5Y8/1）	1.5mm以下の砂粒	口縁部1/16、胴部1/8
80	井戸6	土師器	椀	14.5			3.3	灰白色（10YR8/1）	1mm以下の砂粒	口縁部1/8
81	井戸6	土師器	椀	16.4			3.5	灰白色（10YR8/2）	1.5mm以下の砂粒	口縁部1/12
82	井戸6	土師器	椀	14.3		5.6	4.7	灰白色（2.5Y8/1）	2mm以下の砂粒	口縁部1/13、胴部以下完形、重ね焼き痕
83	井戸6	土師器	椀	14.3		5.4	5.3	灰白色（2.5Y7/1）	3mm以下の砂粒	ほぼ完形
84	井戸6	土師器	椀			5.9	(1.9)	灰白色（2.5Y8/1）	3mm以下の砂粒	高台部完形
85	井戸6	土師器	椀			5.7	(1.6)	灰白色（5Y8/1）	1mm以下の砂粒	高台部完形、重ね焼き痕
86	井戸6	土師器	椀			6.4	(1.2)	灰白色（2.5Y8/1）	2.5mm以下の砂粒	高台部1/4
87	井戸6	土師器	杯	14.0		9.1	(2.7)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	2.5mm以下の砂粒	口縁部1/3
88	井戸6	土師器	皿	8.4		7.7	1.0	灰白色（2.5Y8/1）	1mm以下の砂粒	1/5
89	井戸6	土師器	皿	8.2			(1.7)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	精良	底部指押さえ、口縁部2/3
90	井戸6	土師器	皿	7.9		6.6	1.5	鈍い黄橙色（10YR7/3）	0.5mm以下の砂粒	底部ヘラおこし、ほぼ完形
91	井戸6	瓦器	椀	16.0			(1.9)	灰色（N4/）	精良	口縁部1/8
92	井戸6	土師器	鍋	29.5			(11.4)	灰黄褐色（10YR5/2）	1mm以下の砂粒	口縁部3/8、煤付着
93	井戸6	土師器	鍋	31.8			(5.7)	灰白色（2.5Y8/1）	1mm以下の砂粒	口縁～胴部1/9
94	井戸6	土師器	鍋	33.0			(7.9)	鈍い黄褐色（10YR7/2）	1mm以下の砂粒	口縁部1/5、煤付着
95	井戸6	土師器	鍋	31.4			(7.7)	灰黄褐色（10YR6/2）	1mm以下の砂粒	口縁部1/6、煤付着
96	井戸6	土師器	竈				(7.1)	鈍い褐色（7.5YR6/3）	2mm以下の砂粒	口縁部破片
97	井戸6	備前焼	皿	8.5		6.7	1.9	灰白色（2.5Y7/1）	1mm以下の砂粒	底部糸切、口縁部1/6、重ね焼き痕
98	井戸6	備前焼	壺		15.9	13.2	13.4	灰色（N6/）	1.5mm以下の砂粒	胴部3/4
99	井戸6	備前焼	壺				(6.5)	灰色（N6/）	2.5mm以下の砂粒	胴部破片
100	井戸6	備前焼	鉢	24.0			(3.5)	灰色（N6/1）	1.5mm以下の砂粒	口縁部1/10
101	井戸6	亀山焼	甕	19.6			(7.4)	灰白色（2.5Y7/1）	5mm以下の砂粒	口縁～胴部1/3
102	井戸6	亀山焼	甕	22.5			(5.8)	灰色（N6.5/）	3mm以下の砂粒	口縁部1/6
103	井戸6	亀山焼	甕				(5.6)	灰色（N5/）	3mm以下の砂粒	胴部破片
104	井戸6	亀山焼	甕				(8.3)	灰色（N5/）	1.5mm以下の砂粒	胴部破片
105	井戸6	須恵器	甕				(12.1)	鈍い黄橙色（10YR7/4）	2mm以下の砂粒	東播系、胴部破片
106	井戸6	白磁	椀	15.6			(3.2)	灰白色（5Y7/2）	精良	口縁部破片
107	井戸6	白磁	皿			5.4	(1.0)	灰白色（5Y8/1）	精良	高台部露胎、削出高台、底部1/4
108	土壙1	須恵器	杯			9.6	(0.8)	灰色（7.5Y5/1）	1mm以下の砂粒	底部破片
109	土壙1	黒色土器	椀			7.0	(1.0)	鈍い黄褐色（10YR5/3）	1mm以下の砂粒	高台部破片
110	溝2	黒色土器	椀	15.0			(2.5)	鈍い黄橙色（10YR6/3）	1mm以下の砂粒	口縁部1/16
111	溝2	黒色土器	椀	13.0			(2.0)	鈍い橙色（7.5YR6/4）	1.5mm以下の砂粒	口縁部1/11
112	溝2	土師器	椀			6.0	(1.0)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	0.5mm以下の砂粒	高台部1/4
113	溝2	土師器	杯	14.2		6.5	3.0	鈍い黄褐色（10YR7/2）	0.5mm以下の砂粒	1/7
114	溝2	土師器	杯	16.0		8.4	3.0	鈍い橙色（7.5YR7/3）	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/10、底部1/5
115	溝2	土師器	杯	16.3		10.4	3.8	鈍い黄橙色（10YR7/3）	精良	1/8、煤付着
116	溝3・4	土師器	椀	11.4			(3.1)	浅黄橙色（10YR8/3）	3.5mm以下の砂粒	1/4
117	溝3・4	土師器	椀	11.4			(3.1)	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	1/3
118	溝3・4	土師器	椀	12.0			(2.7)	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	1/4
119	溝3・4	土師器	椀	11.6			(2.5)	灰白色（2.5Y8/2）	精良	1/8
120	溝3・4	土師器	椀			5.9	(2.5)	浅黄橙色（10YR8/3）	2mm以下の砂粒	高台部3/4
121	溝3・4	土師器	椀			6.0	(2.1)	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	高台部1/4
122	溝3・4	土師器	椀			5.2	(1.2)	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	高台部1/4
123	溝3・4	土師器	椀			5.0	(1.1)	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	高台部1/2
124	溝3・4	土師器	椀			3.4	(1.2)	灰白色（2.5Y8/2）	1mm以下の砂粒	高台部1/2
125	溝3・4	土師器	皿	6.5		5.1	1.1	鈍い橙色（7.5YR7/4）	精良	底部ヘラ切り？、1/4
126	溝3・4	土師器	脚台	6.1			(3.0)	鈍い黄褐色（10YR7/2）	1mm以下の砂粒	台部完形
127	溝3・4	土師器	鍋	38.4			(2.6)	鈍い黄橙色（10YR6/3）	1mm以下の砂粒	口縁部破片
128	溝3・4	瓦器	椀				(1.5)	灰色（N4/）	精良	口縁部破片
129	溝3・4	瓦器	椀			4.4	(1.2)	灰白色（2.5Y7/1）	精良	高台部破片
130	溝3・4	白磁	椀	17.5			(2.6)	灰白色（5Y7/1）	精良	口縁部破片
131	溝3・4	白磁	椀	17.0			(1.3)	灰白色（5Y7/1）	精良	口縁部破片
132	溝5	土師器	椀	10.9		4.4	3.5	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	口縁部1/6、底部3/4
133	溝5	土師器	高台杯	8.3		6.0	2.2	橙色（5YR7/6）	1.5mm以下の砂粒	底部ヘラ切り、1/2
134	溝7	土師器	椀	15.3			(2.3)	灰白色（10YR8/1）	精良	口縁部破片
135	溝7	土師器	皿	9.0		6.7	1.3	灰黄色（2.5Y6/2）	精良	1/8
136	溝7	須恵器	すり鉢	28.6			(4.4)	灰色（N6/）	1mm以下の砂粒	東播系、口縁部1/16
137	溝7	白磁	椀	16.4			(1.5)	灰白色（2.5Y8/2）	精良	口縁部破片
138	溝8	土師器	椀				(1.8)	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	口縁部破片

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				色調	胎土	特徴
				口径	胴径	底径	器高			
139	溝3～8上層	土師器	椀	12.0		5.0	3.6	灰白色（10YR8/2）	2mm以下の砂粒	口縁部1/8、底部完形
140	溝3～8上層	土師器	椀	10.4		4.2	3.6	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	口縁部1/2、底部完形
141	溝3～8上層	土師器	椀			4.8	(2.4)	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	高台部1/2
142	溝3～8上層	土師器	椀			6.4	(2.0)	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	高台部1/4、重ね焼き痕
143	溝3～8上層	土師器	椀			4.4	(1.3)	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	高台部1/2
144	溝3～8上層	土師器	鍋脚部				(9.8)	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1.5mm以下の砂粒	脚部破片
145	溝3～8上層	土師器	竈				(5.1)	灰黄褐色（7.5YR4/2）	3mm以下の砂粒	口縁部破片、煤付着
146	溝3～8上層	土師器	竈				(11.7)	鈍い橙色（5YR6/4）	3mm以下の砂粒	口縁部破片、煤付着
147	溝3～8上層	瓦器	椀	15.6			(3.7)	灰色（N5/）	精良	口縁部破片
148	溝3～8上層	瓦器	椀	15.6			(1.9)	黒褐色（10YR3/1）	1mm以下の砂粒	口縁部1/12
149	溝3～8上層	備前焼	徳利？			4.0	(1.0)	鈍い赤褐色（2.5YR5/3）	1.5mm以下の砂粒	底部糸切り、底部1/3
150	溝3～8上層	須恵器	こね鉢	28.2			(4.6)	灰白色（2.5Y7/1）	0.5mm以下の砂粒	東播系、口縁部破片
151	溝3～8上層	不明陶器	壺				(1.0)	黄灰色（2.5Y6/1）	精良	肩部破片、外面施釉
152	溝3～8上層	白磁	椀	19.6			(3.1)	灰オリーブ色（5Y6/2）	精良	高台部露胎、1/12
153	溝9	黒色土器	椀			6.4	(2.9)	灰黄褐色（10YR6/2）	1mm以下の砂粒	有段輪高台、高台部1/4
154	溝9	瓦器	椀				(1.9)	褐灰色（10YR4/1）	精良	口縁部破片
155	溝9	土師器	椀	17.1			(4.2)	鈍い褐色（7.5YR6/3）	1mm以下の砂粒	1/12
156	溝9	土師器	皿	8.1		11.8	1.3	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	1/4
157	溝9	土師器	鍋	37.0			(8.3)	鈍い褐色（7.5YR6/3）	1mm以下の砂粒	1/10、煤付着
158	溝9	灰釉陶器	椀				(1.5)	灰白色（2.5Y7/1）	精良	墨書、口縁部破片
159	溝9	白磁	椀	17.2			(1.8)	灰白色（5Y8/1）	精良	口縁部1/16
160	溝10	須恵器	椀				(2.6)	灰白色（N7/）	精良	口縁部破片
161	溝11	須恵器	椀	16.0			(2.7)	灰色（5Y6/1）	1mm以下の砂粒	1/8
162	溝11	須恵器	椀			6.0	(1.1)	灰白色（2.5Y8/1）	1mm以下の砂粒	底部糸切り、底部1/4、焼成不良
163	溝11	黒色土器	椀	15.0			(5.1)	鈍い橙色（7.5YR7/3）	1mm以下の砂粒	1/8
164	溝11	土師器	椀	15.3		6.7	5.5	鈍い黄橙色（10YR7/3）	1mm以下の砂粒	口縁部1/8、高台部4/5
165	溝11	緑釉陶器	椀				(1.2)	暗オリーブ灰色（2.5GY7/1）	精良	京都、口縁部破片
166	溝11	緑釉陶器	椀			6.5	(1.6)	灰オリーブ色（7.5Y5/2）	精良	近江、有段輪高台、底部1/4
167	包含層	須恵器	杯			11.1	(1.5)	灰色（N5/）	1mm以下の砂粒	底部1/2
168	包含層	須恵器	杯			11.0	(1.2)	灰色（N6/）	1mm以下の砂粒	底部1/6
169	包含層	須恵器	杯			8.4	(1.9)	灰色（N6/）	1mm以下の砂粒	底部1/6
170	包含層	須恵器	杯			8.9	(1.7)	灰色（7.5Y6/1）	1mm以下の砂粒	底部1/8
171	包含層	須恵器	杯			7.6	(1.0)	灰色（N5/）	精良	底部1/4
172	包含層	須恵器	杯	13.2		8.6	2.7	灰色（7.5Y6/1）	精良	口縁部破片
173	包含層	須恵器	椀			6.2	(1.8)	灰白色（N7/）	2mm以下の砂粒	底部1/4
174	包含層	須恵器	椀			6.3	(1.5)	灰色（5Y6/1）	精良	底部糸切り、底部1/4、重ね焼き痕
175	包含層	須恵器	椀			4.8	(2.1)	灰白色（7.5Y7/1）	1mm以下の砂粒	底部1/5
176	包含層	須恵器	壺			10.2	(4.3)	灰色（7.5Y5/1）	精良	底部1/4
177	包含層	須恵器	甕				(5.4)	灰色（N5/）	1mm以下の砂粒	胴部破片
178	包含層	須恵器	甕				(5.7)	灰色（N6/）	1mm以下の砂粒	胴部破片
179	包含層	須恵器	甕				(4.2)	灰色（N5/）	精良	胴部破片
180	包含層	須恵器	甕				(6.7)	灰色（N6/）	精良	胴部破片
181	包含層	黒色土器	椀	15.8			(3.8)	鈍い黄橙色（10YR6/4）	1mm以下の砂粒	口縁部破片
182	包含層	黒色土器	椀			7.8	(1.4)	灰白色（2.5Y8/2）	精良	高台部1/2
183	包含層	黒色土器	椀			7.0	(1.6)	灰黄褐色（10YR4/2）	1mm以下の砂粒	高台部1/4
184	包含層	黒色土器	椀			6.4	(1.4)	鈍い褐色（7.5YR6/3）	1mm以下の砂粒	高台部1/2
185	包含層	土師器	杯	13.4			(1.9)	橙色（5YR6/6）	1mm以下の砂粒	口縁部破片、内外面赤彩
186	包含層	土師器	杯			8.0	(2.4)	鈍い橙色（5YR6/4）	2mm以下の砂粒	高台部1/7
187	包含層	土師器	杯	11.6		8.0	1.8	鈍い橙色（7.5YR7/3）	1mm以下の砂粒	1/6
188	包含層	土師器	杯	15.0		10.2	3.0	鈍い黄橙色（10YR7/3）	精良	1/8
189	包含層	土師器	杯	13.0		7.8	2.0	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	底部ヘラ切り後ナデ、口縁部1/10、底部1/4
190	包含層	土師器	皿	9.0		7.2	1.1	灰白色（10YR8/2）	1mm以下の砂粒	底部糸切り、1/3
191	包含層	土師器	皿	8.5		6.7	1.3	鈍い黄橙色（10YR7/4）	精良	底部ヘラ切り、1/2
192	包含層	土師器	皿	8.2		6.6	1.5	鈍い橙色（7.5YR7/4）	1mm以下の砂粒	底部ヘラ切り、口縁部1/8、底部1/2
193	包含層	土師器	釜	24.2			(4.0)	灰黄褐色（10YR5/2）	2mm以下の砂粒	口縁部破片、煤付着
194	包含層	土師器	釜	22.3			(5.2)	鈍い橙色（7.5YR7/3）	1mm以下の砂粒	口縁部1/5
195	包含層	土師器	釜	23.0			(6.1)	鈍い黄橙色（10YR6/3）	1mm以下の砂粒	口縁部1/8
196	包含層	備前焼	壺	13.6			(4.1)	灰色（N4/）	精良	口縁部1/8
197	包含層	緑釉陶器	椀				(1.5)	オリーブ灰色（10Y6/2）	精良	京都、口縁部破片

1　1区全景（南西から）

2　2区全景（南から）

図版 2

1　井戸 1 土層断面（南から）

2　井戸 1（北から）

3　井戸 2 検出状況（東から）

4　井戸 2 土層断面（東から）

5　井戸 2 上層遺物出土状況（東から）

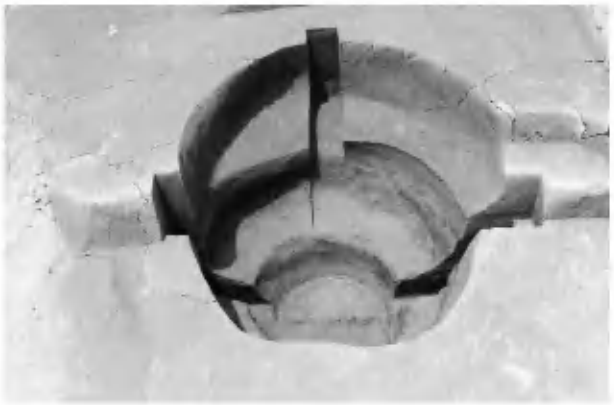
6　井戸 2 発掘調査風景（南東から）

7　井戸 2（西から）

8　井戸 3 井筒検出状況（東から）

1　井戸 3（東から）

2　井戸 3 出土井筒



3　井戸 4（東から）

4　井戸 5（東から）

5　井戸 5 木製品出土状況（東から）

6　井戸 5 井筒検出状況（東から）

7　井戸 6 上層遺物出土状況（東から）

8　井戸 6 下層遺物出土状況（南東から）

図版 4

1　井戸 6 下層遺物出土状況（南東から）

2　井戸 6（東から）

3　土壙 1（南から）

4　溝 2 発掘調査風景（南から）

5　溝 2 獣骨出土状況（東から）

6　溝 3 ～ 8 発掘調査風景（東から）

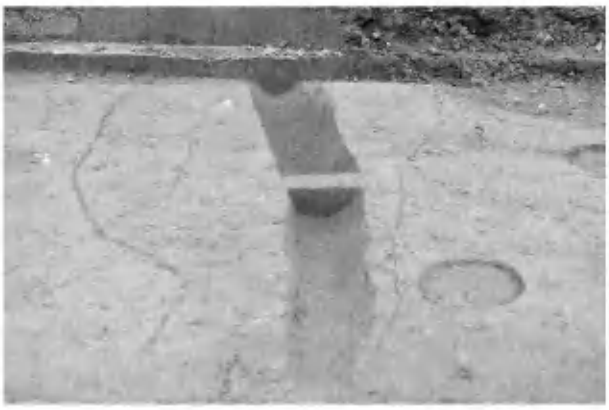
7　溝 3 ～ 8 土層断面（東から）

8　溝 3 ～ 8（西から）

1　溝 9 ～11（西から）

2　溝 9 ～11発掘調査風景（西から）

3　溝 9 土層断面（西から）



4　溝10（西から）

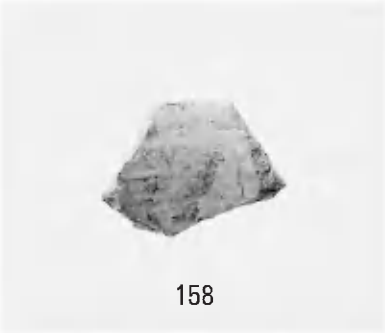
5　溝11（西から）

図版 6

1

22

98


158

50

51

68

74

89

56

115

92

出土土器 1

14

15

17

18

54

55

90

191

192

出土土器 2

図版 8

132

48

49

31

38

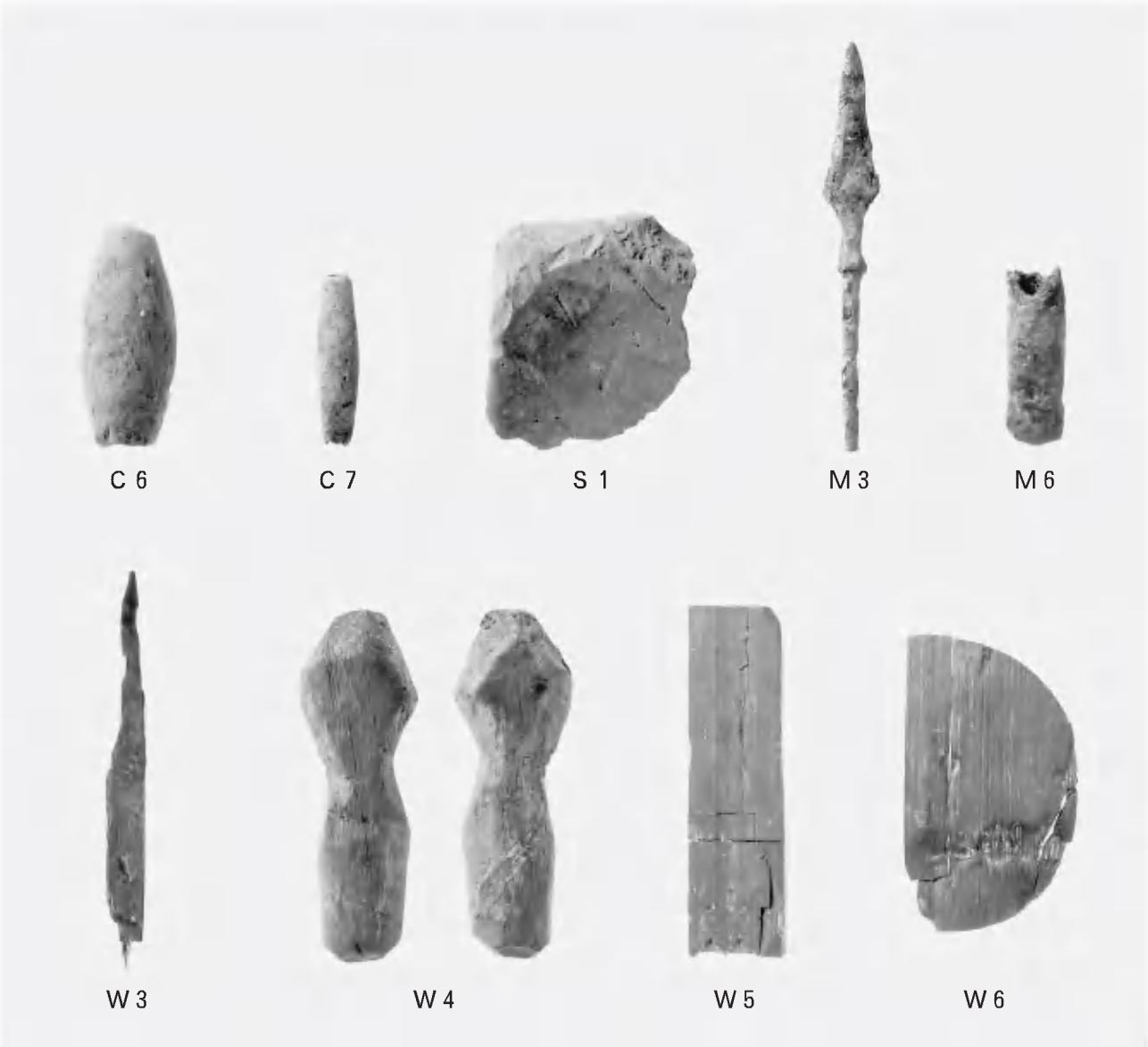
164

82

83

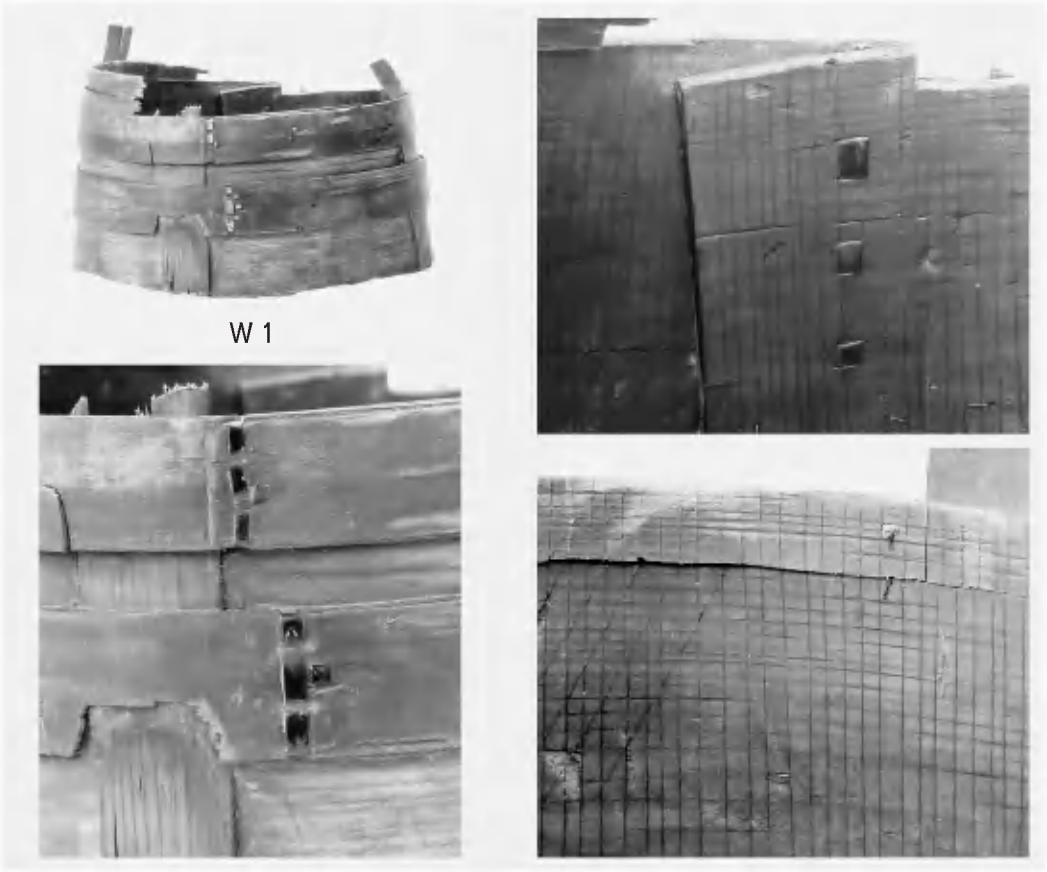
132

出土土器 3

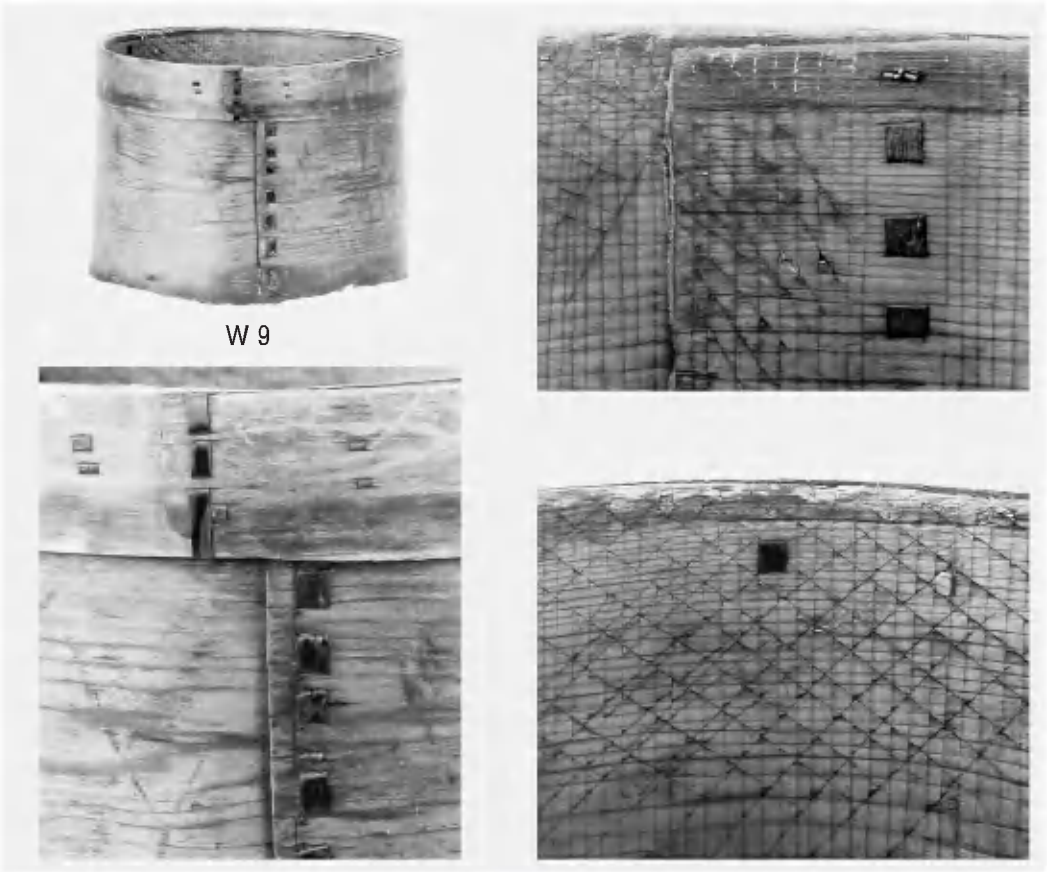


出土土器 4 ・土製品・石製品・金属製品・木製品 1

図版10



W 1



W 9

出土木製品 2

報 告 書 抄 録

ふりがな	しかた いせき
書名	鹿田遺跡
副書名	県立岡山病院第Ⅲ期整備事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	210
編著者名	河合　忍・平井泰男
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL 086-293-3211 http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL 086-224-2111
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しかた いせき 鹿田遺跡	おかやまけん 岡山県 おかやまし 岡山市 しかた ほんまち 鹿田本町 3－16	33201	332012283	34度 40分 33秒	133度 46分 10秒	20060401～ 20060630	1,060	道路改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鹿田遺跡	集落	平安～鎌倉時代	井戸6 土壙1 溝11	土器（土師器・須恵器・黒色土器）、陶器（緑釉・灰釉・備前・亀山・東播・常滑）、磁器（白磁）、土製品（土錘）、石製品（砥石）・木製品（曲物・人形）・金属製品（鏃）・自然遺物（獣骨）	鹿田荘所在推定地

要約	10世紀末～11世紀代の井戸・土壙・溝および12世紀末～13世紀代の井戸・溝などを確認した。出土遺物の中には、緑釉陶器などの貴重な遺物が含まれていることから、調査地付近にその所在が比定される鹿田荘との関わりが注目される。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 210

鹿　田　遺　跡

県立岡山病院第Ⅲ期整備事業に伴う発掘調査

平成19年３月20日　印刷
平成19年３月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷　株式会社 三門印刷所
岡山市高屋116-7

R100
本文用紙は古紙配合率100%再生紙を使用しています。